

JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES

モンゴル研究

No. 33

《講義録》

VIVANT と烈士之碑と COP28

大阪大学最終講義にかえて

芝山 豊

《研究ノート》

情報化社会における少数民族伝統芸能の発展と活用

— モンゴル族の口承文芸ホーリン・ウリゲルの考察 —

白 国 忠

《翻 訳》

Д. ナツアグドルジ 「青の風景」

(訳) 織田 幸彦

Д. ナツアグドルジ 「科学」

(訳) 織田 幸彦

Д. ナツアグドルジ 「青春は花の如く」

(訳) 織田 幸彦

《雑 感》

2024 年夏・モンゴルの旅

— ホブド点描 —

吉本 るり子

《活動報告》

活動報告 (2024 年)

吉本 周平・内田 敦之

モンゴル研究会

大 阪
2024

VIVANT と烈士之碑と COP28

大阪大学最終講義にかえて

芝山 豊

0 「生涯の経歴」

これからお話するのは、2023年7月16日から9月17日まで、TBS系「日曜劇場」枠で放送されたテレビドラマ『VIVANT』と、1938年6月に大阪上本町の大阪外国語学校の正門脇に建立され、いまは、北大阪急行箕面船場阪大前駅に隣接する大阪大学箕面キャンパスの目立たぬ場所に安置されている烈士之碑と、2023年11月30日から12月13日までドバイで開かれたCOP28がどうつながり、それが、わたしたちにどんな意味をもっているのかという三題噺です。

興味をもって聞いていただけるようにするつもりですが、目に、心に、痛い話もしなくてはなりません。

「真実には目に痛い」(Правда глаза колет)というロシア語の言い回しを覚えたのは、『モンゴル研究』創刊に関わる少し前、十代の終わり頃でした。そこから半世紀以上を経て、体力、知力ともに実年齢以上に衰え、「従心所欲不踰矩」と、挨拶程度のものは除き、学術会議への参加、論文執筆などへのお誘いは固辞してきました。ところが、2023年の夏、話題のTVドラマを見ていて、画面に向かって、「あ、あかん！」と思わず大きな声をあげてしまいました。「目に痛いもの」を見てしまったのです。

誰かがきっと声をあげてくれるだろうと思いましたが、本格的な批評を目にする機会のないまま、ドラマの放送終了から暫く時が経ち、COP28の結末を知るに及んで、「またか・・・」という無力感に押し拉がれたのです。

見えてしまったものを見なかったことにするとか、沈黙するとか、そんなことができるのかという煩悶の日々が続き、やっと、今日、蛮勇を奮って、「見えてしまったもの」について若い世代の方々へ伝えることにしました。

自己紹介部分のタイトルに選んだ「生涯の経歴」ということばは、出身学校の大先輩である作家司馬遼太郎さんが、「モンゴル語を選んだことが、大きかったですか？」という質問への答えとして使った言葉です¹⁾。

「生涯の経歴になりましたね。」という司馬さんの答えには、口には出さないけれども、「よくもわるくも」という修飾部分が隠れているように、わたしには思えます。

実のところ、司馬さんは、学徒動員の前、モンゴル語をほんの短い時間学んただけで、モンゴル語

1) 司馬さんとモンゴルについては、拙論「司馬さんのモンゴル」(『モンゴル研究』No.18 2000年)と「司馬遼太郎のモンゴルとモンゴルの司馬遼太郎」(『清泉女学院大学人間学部紀要』第6号 2009年)を参照されたい。

に自信があったわけではありません。そもそも外語への入学も、帝大への道に失敗しての一種の不本意入学であったわけで、入学当時、学内を覆っていた特殊な雰囲気には馴染めていなかったはずで、司馬さんにとって、大阪外語の蒙古語出身であることが、履歴上の汚点みたいに思えたこともあったと思います。実際、司馬さんには、そのことに触れない時期がありました。

学歴を問われて、「京大文学部に学んだ」と言えばそれだけですむところが、大阪外語蒙古語出身という、すぐに「どうして、モンゴル語を？」といった類の面倒な質問が続くことになります。今の人なら、「学歴ロンダリングして、記憶や記録から抹消してしまえばよいのに」と思うかも知れません。しかし、ことはそんな単純なものではないのです。モンゴルを学んでしまうと、何かに出会う度に、「これって、モンゴル語で言うとうどうなるのかな」とか、「これをモンゴル人の立場から見るとどうなるのか」と、ついつい考えてしまう癖がついてしまうからです。そうすると、日本語や漢文、英語やメジャーな西洋語だけから考えていると、まず、見えてこないものが、いやでも見えてしまいます。

『世界史の誕生』で知られる歴史学者、岡田英弘さんは「司馬遼太郎はモンゴル通か？」という文章の中で、司馬さんの知識の限界について語っています。確かに、司馬さんは岡田さんと同じような学者ではありませんでしたが、勝手に自分をモンゴル通だと思い込む人々へいちいち説明はしなかったものの、自ら学者面したり、ましてや、モンゴリストであると公言したりはしていません。まあ、昭和男性に共通する mansplaining 的傾向がないとは言えないでしょうが、新説を掲げて学界に挑戦しようというような意気込みはもっていなかったはずで、ただ、モンゴルを通して、世界と自分たちのことを見る癖が、新聞記者や作家としての人格形成、世界観にまで、嫌でも関わってしまったことには自覚的でした。司馬さんのモンゴル観は時代によって大きく変化し、その変化は作品にも反映されてきました。モンゴルを学んだことは、青春の思い出や履歴の一齣ではなく、まさしく、作家としての「生涯の」経歴だと言わざるを得なかったのです。

勿論、これはモンゴル語に限ったことではありません。それがどんな言語であれ、その言語の文化、その言語で考え暮らしている人々とその歴史に真剣に関わってしまうと、きっとそうなるのだと思います。ただ、後述するように、近代の日本人にとって、モンゴルは、とりわけ特別なものなのです。

斯く言うわたしもモンゴルを学んだことを生涯の経歴としてしまった一人です。

「たたかう言語学者」などとも称される田中克彦さんは「研究は外交ではない」という意味のことを言っています。確かに、職業的の外国研究者は外交と無縁ではられない存在です。ここで言う外交は、社交的辞令だけでなく、利害関係を孕む付度や自己規制など言い換えられるかもしれません。田中さん自身、中国での学会で内モンゴルへの言及を避けるように言われて、内容を他の国の歴史に仮託して切り抜けたということを書かれていますし、モンゴル人民共和国時代、田中さんの講義の雑談の中で、「このことを書くと、二度とモンゴルには入国できないからね」と洩らされたのを聞いた記憶があります。

幸い、わたしには、生業としての縛りがなかった分だけ、また、身分や、社会的影響力がない分だけ、ある程度、自由に、「日本人が知りたくないこと」、「モンゴルの人が聞きたくないこと」を言ったり、書いたりすることができました。勿論、それも、あくまで「ある程度」であって、わたしのような社会的影響力のない人間にも、配慮は必要です。「外交」は、自分の身や立場を守ることだけではありません。モンゴリストとして発言、行動する場合、中華人民共和国内やロシアで活動している、民族活動家、人権活動家、宗教関係者らは勿論ですが、「民主化」後のモンゴル国内でも、体制や大国の方

針に抗い活動している市民活動家、環境保護活動家など、友人であれ、善意の情報提供者であれ、面識のない人物であっても、自分の不用意な言動によって、それらの人々を危険に陥れ、不利な立場に追い込む可能性があることを配慮し、慎重に行動せねばなりません。以下のお話にもそうした配慮が働いていると思って下さい。

なお、話の中で「さん」と呼ぶ方々には、本来、「先生」と呼ぶべき方々がおられるわけですが、「先生」というと、制度や学流上の師弟関係と誤解されてしまう恐れがありますので、一度でもお目にかかったことのある方は、恩師や後輩も含め、「さん」とお呼びします。公人や著名人、歴史的人物には敬称はつけず、面識の全くない方の場合、「さん」づけはかえって馴れ馴れしく不快と思われるといけないので、肩書等を適宜つけることにします。

1 『VIVANT』 ホワイトウォッシング オリエンタリズム

前置きが長くなってしまいましたが、ここから、最初のお題、TBS系『日曜劇場』で2023年7月から放送されたドラマ『VIVANT』についてです。

以下、いわゆる「ネタバレ注意」の内容を含んでいます。そして、念のため、申し添えますが、文学研究の立場から見れば、すべての作品、広義のテキストは常に読者に開かれているものであり、唯一の「正しい読み方」というものがあるわけではありません。これからお話しするのは、当該のテキストをこう読むことが可能だということであって、こう読まなければならないということを主張しているわけではありません。

TBS系『日曜劇場』と言えば、昭和世代にも懐かしい、民放最長寿番組のひとつです。1950年代後半に『東芝日曜劇場』として誕生し、70年近い歴史をもつTBS系の看板番組であり、多くのヒット作品を生み出してきました。リアルタイムの放送でのTV離れが進む中で、平成時代の日本のテレビドラマ最高視聴率42.2%という栄光の再来を夢見て作られたのが『VIVANT』です。

まず、思わせぶりのタイトルの説明から始めましょう。

VIVANTという綴りを、制作側としては、ラテン語読みではなく、語末綴りのTを発音しないフランス語風に発音してほしいようで、「ヴィヴァン」とカナ表記されています。

放送前、ドラマの内容はほとんど明かされず、この横文字のタイトルとメインキャストだけが発表されていました。実は、最初、わたしもこのタイトルにひかれて、所謂、teaser、「じらし広告」に誘導された一人です。

やがて、「じらし」に名指しされていないものの、明らかにモンゴルだと分かる風景が登場しました。『ナショナル ジオグラフィック』誌に登場するようなモンゴルの景色に、日本の人気俳優を配するとすれば、長年、日本人のモンゴル観を論じてきた者としては、チェックしておかないわけにはいかないと、番組を真面目に見始めたわけです。まさに、「生涯の経歴」のなせるわざですね。

さて、物語は、ある日本商社の多額の電子誤送金に始まり、中央ユーラシアの架空の国「バラカ」を舞台に展開します。モンゴル国の西に隣接するという設定の架空の国では、広義のモンゴル語のハルハ方言をベースとした現在のモンゴル国の国語(「国家公用語」)が使われていることになっていま

す²⁾。

VIVANT という単語はモンゴル語の語彙にはありませんから、物語の冒頭では謎のままです。物語が少し動き始めて、VIVANT は、陸上自衛隊の「別班」、すなはち、陸上自衛隊幕僚監部運用支援・情報部別班 BEPPAN、のことだと明かされます。

別班は、石井暁著『自衛隊の闇組織』（講談社現代新書 2018年）で一般にも知られるようになった組織です。いまもって、政府、防衛省がその存在を公式に認めようとしない、国民に馴染のない組織。この大日本帝国陸軍中野学校の流れを汲み、国内外でスパイ活動を行う「別班」のメンバーが、モンゴル語話者たちの世界と深く関わる中で、敵に偽装の正体を見破られ、彼の行動をモニターしていた公安当局に対し、モンゴル語での会話の中の正体を韜晦するためにでっちあげた類音語が VIVANT なのです。別班員が公安を誤魔化そうとしているわけですから、実際にモンゴル人が「べっばん」をキリル文字で書いて、VIVANT「ヴィヴァン」と発音するか否か（多分、しません）は関係ありません。音響音声学的な議論には興味がないので省きますが、主人公が「モンゴル語で言う俺は VIVANT だ！」という脅しを吐くのは前述の設定上からやや無理がある気がします。

キリル表記云々はこじつけで、死んだはずの誰かが生きているという重要な要素を暗示することばが欲しくて、「生きている」という意味の形容詞、名詞で「生者」とか、「生存中」という意味のフランス語が選ばれたのかも知れません。このタイトルは、漢字表記の「別班」の喚起する悍まじさを和らげつつ、伏線回収型の視聴者を引き付ける仕掛けの一環なのだと思います。

原作・演出を手掛けた福澤克雄監督は、放送前、作品への意気込みを、WEB サイトで、つぎのようにコメントしています。

「たまたまラジオから流れてきたある話が非常に興味深く、本作を企画しました。普段はモデルとなる映画やドラマを想定するのですが、本作『VIVANT』はどんなドラマにも当てはまらない、日本ではあまり見たことのないドラマになると思っています。正直怖さもありますが、自分自身も冒険をしている感覚でチャレンジしたいと思っています。誰が敵で誰が味方なのか、視聴者の予想を次々と裏切っていくエンターテインメントをお届けいたしますので、ぜひご覧いただければうれしいです。」³⁾

「日本ではあまり見たことのないドラマになる」とありますから、意地悪く言えば、日本以外ではま見られるドラマだという表明とも言えますが、欧米並みのものを作ることを見せてやるという意気込みでしょう。実際、福澤監督は、公開後のインタビューの中で「海外ドラマ的な作りを試してみたかった」と発言しています⁴⁾。

一般論として、日本であろうと、アメリカやヨーロッパであろうと、物語にそれほど斬新なものはありません。The Thirty Six Dramatic Situations というような類のものがよく知られていますが、完全に新奇な物語を考えることは困難です。洋の東西を問わず、どんなドラマも、基本的には、これま

2) モンゴルについて多少の知識をもつものには、バルカという架空の国名は、実在のバルガを連想させるだろう。試みに、複数の日本人とモンゴル人に聞いてみたが、皆それを思い浮かべたと答えている。もし、意図的にバルガとの連想を狙ったものだとすれば、拙論「村上春樹とモンゴル—もうひとつのオリエンタリズム」(『モンゴル研究』No.17 モンゴル研究会 1998年)で言及した、榎本武揚から村上春樹まで延々とコピーされ続けてきたプリアートやバルガに対する日本人の偏見を上書きしたことになる。

3) https://www.tbs.co.jp/VIVANT_tbs/about/ (最終確認 2024年3月13日)

4) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年) 311頁。

で人類が継承してきた物語素やプロットの組み合わせでできています。ですから、かつて誰もみたことのないドラマを作ることは誰にも困難ですし、もし完全に未知の物語素や神話素が未知のプロットで提示されたら、観る人は理解できないし、面白がることも難しいはずです。

制作者は、日本型のドラマではこれまでなかったような設定と作り方を考えていたのですから、日本での放送が「好評」を博した後、海外への配信が日本での放送ほどの成功を収めていないという事実は特に驚くことではないでしょう。

知られざる非合法組織があって、その悪の組織は、実は既存の体制の歪みの中に潜む悪人や悪の組織と戦っているといった設定は、陰謀論好きの多いアメリカのドラマには頻りに登場しますし、善と悪の戦いに、出生の秘密、親子の愛憎、葛藤が絡むといった『スター・ウォーズ』風の古典的設定は、掃いて捨てるほどあります。

例えば、日本でもCSで放送されていたNBCの『ブラックリスト』(The Blacklist)はまさにそのような設定のドラマです。カンヌ国際映画祭主演男優賞受賞者のジェームズ・スペイダーが主演し、2013年から2023年まで続きました。多くの裏切りを経験したスペイダー演ずる元米海軍情報部エージェントを主人公とし、幼少期の曖昧な記憶と出生の秘密を抱える新人FBI女性エージェント、CIA、NSA、モサド、MI6、元KGB、マフィアや中華系組織まで入り乱れてのクライム・アクション・サスペンスです。舞台は主に米国内ですが、時として海外にも及びます。あまりに長く続いたので、出来にはかなり斑がありますが、ディラン・トマスの詩の一節を引用して主人公の最期を飾った長い物語の中には、『VIVANT』で使われていた要素のほぼすべてが入っているとんでもよいように思います。(ちなみに『VIVANT』ではラストに続編をおわす『書経』の一節が引用されます。)

こうした例を考えれば、「日本ではあまり見たことのないドラマ」になる部分は、米国TVドラマ的な登場人物や諜報機関や国際的陰謀が、「日本人を主人公にして日本とつながる社会背景で展開する」新味にあるのでしょう。

一部メディアが「視聴率や無料配信の再生数、SNSの反応などで、社会現象となった」と持ち上げるほど、『VIVANT』が日本で広く見られたのかどうかわかりません。(わたしの周囲のモンゴル関係者には全編通して観た人は意外なほど少なかった。)恐らく、『VIVANT』の視聴ターゲットは、海外ドラマを字幕やオリジナル音声で見たいというタイプの視聴者というより、平成のサラリーマンの鬱屈を『水戸黄門』的な勧善懲悪物語の枠組みで解消してくれた福澤克雄監督と、堺雅人、阿部寛らお馴染みのスターのコラボレーションを、海外ロケ豪華版『半沢直樹』スパイ・バージョンとして喜んでくれる人たちだったのではないかと想像します。

日本でのTV放送開始と同時に生まれ、TVとともに生きてきた最も古い世代として、TVドラマの復活を応援したいですし、そのエンターテインメント性、演技や、音楽、楽しませ方の仕掛けの巧拙等にいちいち文句を言うつもりはありません。とは言え、2020年代に、中央ユーラシアの諸民族の文化を扱う物語を、世界の一般視聴者に向けて、日本から発信するスケールの大きなドラマ作りを試してみたかったならば、時代遅れの1950、60年代ハリウッド映画的な作品づくりではなく、21世紀のグローバル・スタンダードの制作姿勢が求められるはずで

配慮すべきことを取って英語で示すと、まず、排除すべきものとして、sexism, racism, whitewashing, cultural appropriation, ethnocentrism, orientalism など、必要なものとして、inclusion, religious literacy, ecology, animal welfareなどが考えられるでしょう。

残念ながら、これらに十分に配慮されていて、全く文句の付けようもない、という類の作品は、世界中にまだそれほど多くないと思います。

例えば、2014年から2016年までNetflixで配信され、日本でも見る事ができた『マルコ・ポーロ (Marco Polo)』もモンゴルを舞台にしていました。カザフスタンにロケして作られたこのTV映画は、me too 運動で悪行が世界中に知れ渡ったハーヴェイ・ワインスタインが製作したもので、過剰な性的描写もセールスポイントだったと思われますが、英語圏で広く読まれたジャック・ウェザーフォードのThe Secret History of the Mongol Queens (2010年)の影響もあってか、これまでの類似の映画では従属的な役割しか与えられなかったチングスの時代の女性に焦点を当てようという意図はありました。ただ、その「戦うお姫様」の形象は、男性的な競争原理によるマッチョイズムを単に女性へ置き換えたものに過ぎず、排除の論理の対局にある女性の「ケアの倫理」の視点を欠くもので、わたしには評価できませんし、オリエンタリズムから抜け出しているとは、およそ言い難いものでした。

『VIVANT』の場合はどうでしょう。ハッカー、女性大使や女性の自衛隊幹部を登場させてはいるものの、日本人もモンゴル人を始めとする他民族の女性の描き方、男性の描き方には、あからさまに、家父長制を前面に押し出した日本型ステレオタイプのジェンダーモデルが使われている印象です。

最も違和感をもったのは、夫のスパイとしての任務を承知しながら、紛争地域で夫を支えて働き、所属機関の裏切りで、子どもを失い、夫とともに敵に拘束され、拷問の果てに逝った主人公の母親が夫に強く復讐を望んだという設定です。結局、その復讐は意外な結末となり、その結果に母親も満足しただろうという話になるのですが、この処理の仕方は、男性目線のご都合主義との批判は免れないところかなと思います。尤も、ジェンダー論やフェミニズムからの分析は、わたしが語るより、ここにおられる今岡さんをはじめ、より相応しい方々にお任せし、検討の必要性を指摘するに留めましょう。

インクルージョンに関してはさらに大きな問題がありそうです。

先天性疾患の少女、喋れないらしい人物もキーパーソンとして登場しますが、モンゴルでも話題になることが増えたLGBTについては、現在の日本の水準から言っても改善の余地がありそうな気がします。それよりもっと気になるのは、エンドロールのキャストにごくわずかのモンゴル人の名しか見られないことです。

重要な意味をもつ登場人物のキャスティングに、明らかなホワイトウォッシングが見てとれます。

モンゴル国でロケをし、日本側の主要キャストにモンゴル語の台詞をしゃべらせておきながら、バルカ国のモンゴル語話者役に、何故、モンゴル人やカザフ人やアルタイ人の俳優を使わず、日本人俳優にモンゴル語で演技させたのでしょうか？

例え、『征服者』(The Conqueror 1956年)でジョン・ウエイン演ずるチングス・ハーンに違和感を覚えなくても、『八月の茶屋』(The Teahouse of the August Moon 1956年)でのマーロン・ブランド、『ティファニーで朝食を』(Breakfast at Tiffany's 1961年)でのミッキー・ルーニーが演じる日本人を全く抵抗感なく、楽しんで見るのできる日本人は少ないはずです。

モンゴル国内で撮影され、モンゴル国内での放送が想定されていたのなら、所謂、フォリナートーク的なものにしろ、流暢なものにしろ、日本人役のモンゴル語はよいとして、バルカ人やモンゴル人としてのモンゴル語話者役を日本の俳優に演技させて本当によかったのでしょうか？

モンゴル語の統語関係は確かに日本語に似ていますので、日本人には学びやすい言語ではありますが、他方、音韻体系が全く違うので、自然な発音はなかなか難しい。それが出来たとしても、後述す

るスパイ活動の要諦からも明らかなように、～人らしさで重要なのは、現地の人間らしい息づかいと自然な身のこなしです。

俳優さんたちの努力に敬意を払うにやぶさかではありませんが、外国人の発話として達意のモンゴル語になっていたとしても、モンゴル国で放送するなら、モンゴル語話者の台詞は、結局はアメリカでよくやるように、現地で吹替しなければなりません。実際、モンゴル国でもそうしていたという話を聞きました。

『VIVANT』の中のモンゴル語は、1982年のSF映画『ブレードランナー』(Blade Runner)の冒頭シーンの日本語のように、まあ、雰囲気さえでていればよい程度のものであったということでしょうか？おそらく、そうではないはずです。

では、何故、こんな結果になったのか、その理由は、福澤監督ら制作側の、モンゴル人やその文化に対する奇妙な思い込みによるものだと思います。

福澤監督は放送後のインタビューの中で、「二宮さんは相変わらず飄々としていて、バルカ人の役でしたけれど、気負わずに演じてくれました。現地にいくとわかるけど、モンゴル人って日本人にそっくりなのです。文法も日本語と一緒にだし、中国人や韓国人なんかと比べたら全然日本人に近い。なので、外国人という意識はそれほどしなくてもいいのかなと。」と発言しています⁵⁾。

確かに、両国に相貌が本当によく似ている人がいますので、「おまえにそっくりなモンゴル人を知っている」とか、「あなたは日本の誰々さんそっくりだ」みたいなことをモンゴル人と言った経験をもつ日本人は少なくないでしょうし、社交辞令としても、モンゴルの人、「われわれモンゴル人は日本人と似ているのです」というような話をよくします。そのモンゴルの人が本当にそう思っているのか、そう言うと相手が喜ぶからなのか、わかりません。しかし、日本人の場合、相手のモンゴル人が喜ぶからというより、素直に驚き、親近感をもっている人が多いように感じます。しかし、このナイーブな親近感にこそ危ないものが潜んでいるわけです。

「福澤監督、お言葉ですが、語順がモンゴル語と似ているのは韓国語も同じ。韓国の人の中にはあまり認めたがらない人もいますが、韓国の学者も含め、「訓民正音」の成立にモンゴルのパスパ文字が関わったとする議論もさかに行われていますし、韓国語には元朝時代、モンゴル語から入った言葉も沢山あるのでモンゴル語に近いですね。韓国語と日本語には、漢文の共通語彙があるし、日帝時代に入った語彙もあるからモンゴル語よりずっと近いですよ。顔も似ているし、長い通婚の歴史もありますね。韓国ではいま漢字を使わないけれど、日本人は、モンゴル人がずっと断固拒否した漢字を、それも、中国の人だっていまは使わないような古い漢字を護りつづけ、儒教的教養も大事にしているのに、韓国や中国とはお互いにあまり仲良くないみたいに見えます。日本人とモンゴル人じゃ、自然環境も生業や暮らし方も全く違っているのに、どうして《全然近い》と言えるのですか？」とか、「日本映画界は、戦時中、日本の実効支配下のモンゴル地域で初めてロケをした映画『成吉思汗』のチンギス・ハーン役に戸上城太郎を選びました⁶⁾。その後も、1980年、中華人民共和国中央広播事業局、日本中

5) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年) 315頁。

6) 1943年に、戦時統制下にあった大映京都撮影所が、蒙古聯合自治政府後援を謳い、現地ロケ、現地軍の全面協力により制作した映画。主要キャストはすべて日本人俳優が演じている。完全なオリジナル・フィルムは現存しないとされている。なお、同じ、大映京都撮影所により、1944年公開された『かくて神風は吹く』という「元寇」を描いた国威発揚オールスター映画が作られていたことも興味深い。『かくて神風は吹く』と日本人のモンゴル観については、拙論「神風とシン・ゴジラのしっぽ」(『日本映画学会会報』第51号2017年7月)で触れている。なお、ハリウッド映画に見るモンゴル人像については、スビルパグ作品について論じた、拙論「The Mean Mongolian について」(『日本映画学会会報』第19号2009年9月)を参照されたい。

国文化交流協会協力のTVドラマ『蒼き狼 成吉思汗の生涯』では加藤剛、民主化後のモンゴル国で撮影した2007年の角川春樹製作総指揮の『蒼き狼 地果て海尽きるまで』では反町隆史がチンギス・ハーンを演じました。他にも、2008年には浅野忠信が現代モンゴル語でチンギスを演じるカザフスタンの映画もありましたね。そんな映画をモンゴル人が喜んで見ていると思いますか？日本人は、源義経をモンゴル人俳優が演じる『新平家物語』を見たいですか？」などとモンゴル人が言うかも知れないという想像力が全く欠けているのです。「相手の靴を履いてみよう」とする知的操作としてのエンパシーを欠いた情緒的な「共感なき親近感」というのは極めて厄介なものです。

制作側は明らかにエスノセントリズムに陥っているのです。そして、それは「自分たちは中華思想の中国人やフランス人とは違う、モンゴル人の友達、遅れているモンゴルを助けてあげる父、兄なのだ」という傲慢なパターンリズムに繋がっています。

ドラマの終盤に、その傲慢さが如実に現れたシーンがあります。悪の組織「TENT」の解散を決意した元警視庁公安部外事課のスパイにして謎の国際テロ組織の首魁が、バルカの弱者救済と引き換えに悪の組織の解散を宣言し、日本へ去る場面です。

黒澤映画風に、家紋を染め抜いた旗が風を受けてはためく草原に、国際俳優役所広司演じるノゴーン・ベキなる人物が登場し、配下の人々に別れを告げ去っていくシーンです。

なんと、バルカのモンゴル語話者たち(呆れたことに、モンゴル建国の祖、カミとも崇められるハーンと同じ「チンギス」という名前の警察官も含まれています)は、土下座、平伏して、彼を見送るのです。

勿論、現代のモンゴル人が土下座することは普通ありませんし、半沢直樹やカスハラクレマーのよう、人に土下座を要求することはありません。

「20世紀のはじめ、モンゴル人は、清朝と袂を分かった時、満洲皇帝にとってかわろうとする漢人から跪拝礼を求められて烈火のごとく怒ったことがあったのですよ」とか、「山口幸二さんという言語学者が書かれたように、ある時代まで、サムライということばは、アジア、とりわけ、大日本帝国の植民地や占領地域だった国の言語の中では、極めてネガティブに使われており、モンゴル語においてもそれは残虐な悪鬼のようなものを示す言葉であった時代があったのですよ。ほら、この1999年に北京で刊行された『新蒙漢詞典』に「②日寇」と書かれているでしょ」とか、説明してくれるモンゴル人や通訳者はいなかったのでしょうか。いえ、誰かがそんなことを言ってくれていたとしても、このシーンは決して変更にならなかったはずで。

福澤監督たちは、日本のオーディエンスのために、こういう絵がほしいと思っていたはずですから、制作現場のモンゴル人は、1980年に米国で放送されたジェームズ・クラベル原作の『SHOGUN』というTVドラマがオール日本ロケで作られたときの日本側のキャストやスタッフと同じように、「これはいかがなものか」と思うことがあったとしても、ビジネスとして割り切り、飲みこまねばならなかったのです。「世界のミフネ」がなんと言おうと、結局、アメリカ人が見たいものが作られた『SHOGUN』での構図で、アメリカ人と日本人が入れ替わっただけなのです。

実際、『VIVANT』撮影に協力した現地のモンゴルの人たちは、撮影されている作品がどんなものになるのかを知らされていなかったようです。大きな期待をもった作品の一部鑑賞の機会が与えられた後、大きな失望を抱いたモンゴルの人たちは少なくなかったと聞きました。

仮に現場のモンゴル人が我慢したからと言って、オーディエンスとしてのモンゴルの人たちがそれを快く受け入れるかどうかは別の話ですし、例え、寛大なモンゴル人視聴者が許すとしても、「この程

度のことは許容し、我慢してくれているから、このままでいいじゃないの」と考える態度こそが、エスノセントリズムなのです。

また、『VIVANT』に現われるサムライ的イメージの自己オリエンタル化の問題もありそうです。

司馬さんの作品等でもよく知られる、主に非サムライ階級出身者で組織されていた新撰組の言い立てた「土道」なるものは特殊な発明品でしたし、新渡戸稲造の『武士道』は、キリスト教徒の新渡戸が、近代西洋文明の中のエートスへの批判と、消えゆく日本的エートスを、自分の妻を含むアメリカ人たちへ強弁するために書かれたもので、まさに「近代のための発明品」でした。新渡戸は、近代の功利主義、実利主義、そして個人主義に対峙できるエートスがほしかったのですが、それを過去形で語るしかなかったわけです。

新渡戸の武士道を剽窃して、昭和の帝国陸軍的サムライが言い立てられ、日寇や鬼子というようなイメージを拡散することになったのです。さらに、それが、尾崎士郎のベストセラー『成吉思汗』(1940年)の「モンゴルの征西の後継者は日本人だ」というような妄想と結びつくことになります。

戦後のある時期まで、日本人の中には戦前戦中のサムライ像への反省的な雰囲気の間違いなくありました。1950年代、黒澤明監督の『七人の侍』が封切られた頃、右翼側からも左翼側からもそのサムライ像に強い反発が示され、議論が起こったのです。しかし、今日、スポーツのナショナルチームにサムライの名を冠することの是非について、真剣な議論は全くといっていいほど起こらないのです。

チャンバラ映画のルーツであるハリウッド的なカウボーイ像が修正された程度にすら、メディアにおけるサムライ像は修正されることなく、逆に自己オリエンタル化によって強化され続けています。昔、横山大阪府知事が大阪のたこ焼きをサムライ・ボールと呼ぼうと提案し、響盛を買ったことも今は忘れ去られ、サムライマックなるハンバーガーの日本での発売に文句を言う人たちはいません。

『VIVANT』では、本来、職能集団で非サムライ階級である刀鍛冶の家系の人物がサムライ的なイメージと武士道を普遍化しようとしています。

ノゴーン・ベキの日本刀による制裁場面等、刀とサムライ的イメージに力点が置かれるのは、欧米をはじめとする海外のオーディエンス向けのサービスであり、海外市場向けのマーケティング戦略でしょう。しかし、日本刀のイメージは2023年に全米ヒットした、女性歌手 SZA の「Kill Bill」のプロモーションビデオに見られるように、サムライ的エートスとは全く無関係で、「ヤクザ」的、剥き出しの過激な暴力性の美的アクセサリとなっているのです。

実際のところ、歌舞伎や新国劇や東映健全娯楽時代劇など一度も見たこともない世代の日本人のサムライ像は、まさに、ハリウッド映画のホワイトウォッシングの代表例として米国でやり玉に挙げられる『ラストサムライ』(The Last Samurai 2003年、エドワード・ズウィック監督、トム・クルーズ、渡辺謙共演)の cultural appropriation (文化盗用)を再生産した自己オリエンタル化の産物です。

結果的に、『VIVANT』に映し出されている日本人の姿は、「世界を救うのはアメリカの白人」という典型的なホワイトウォッシング構造を、「戦乱にあえぐ後進国バルカのモンゴル人たちの危急を救うサムライの日本人」に入れ替えただけのものになってしまっています。

日本人たちの中には、自分たちが、非西洋人であるから、オリエンタリズム的な傲慢さ、差別主義から免れていると勘違いしている人が少なくありません。在日本のモンゴル人の人たちは、遠慮してあまりはっきりと言いませんが、日本人の少なからざる部分に、モンゴル人への差別意識や優越感が存在するという事実を、しっかりと自覚し、改善の意識をもたねばなりません。学生、コンビニ店員、

会社員、大学教員、お相撲さんまで、故なき差別に耐えている人たちがいるのです。

勝手な根拠なき親近感を抱きながら、「氏名がそろっていないと入管手続きはできない」とか、「日本に「帰化」しなければ、「国技」たる相撲の親方にはなれない」とか、「日本国籍が欲しければ、アメリカ在留資格のある配偶者と離婚しろ」とか、公的な場所で差別発言を繰り返しても、何が問題なのか分からない人たちがいまでもいます。「大谷翔平選手がアメリカ市民権を得られなければ、MLBにはいられません」とでも言われようものなら人権侵害だと大騒ぎする人々の中にもそんな人たちがいる可能性があります。

蛇足の説明をしておく、「帰化」ということばは、本来、君王の徳化に帰服することです。かつて、内モンゴルのフフホトは帰化城と呼ばれていました。中華世界で狄や蒙古など非漢人がより高度な漢族の文明に帰属を求めてきたことを指す「帰化」は、ある意味で差別的な言葉で、エスノセントリックな中華思想的世界観を露骨に示すことばですから、naturalization の日本語訳語としては大いに問題があります。国技ということばは、近代に誕生した野球について使われた national sport の翻訳語に過ぎず、日本語の伝統的語彙ではありませんし、興行相撲の歴史は相撲協会自身が認めているように、古代の相撲、とりわけ、神事とは直接的な関係はありません。土俵から女性を排除する理由は、伝統とは全く無縁の近代的なものです。

既にここまで、無前提に使ってしまいましたが、オリエンタリズムということばの定義について確認しておきます。

ここで言うオリエンタリズムは東洋趣味という芸術や建築での用語ではなく、エドワード・サイードの定義した意味、乱暴に約めてしまうと、「西洋の東洋に対する思考と支配の様式」のことです。

パレスティナ出身の比較文学者であるサイードが最初に示したのは、イスラームについての西洋社会の言説や態度でしたが、この問題は、イスラーム世界だけにあてはまることではありません。いまでは広く、近代社会の二項対立的な異文化への態度として用いられることばです。

『VIVANT』の中のイスラームの扱いにも大きな問題があります。

日本の映画は、手塚治虫・北杜夫原作の東映動画『アラビアンナイト・シンドバッドの冒険』(1962)や、藤子・F・不二雄原作のシンエイ動画「ドラえもん のび太のドラビアンナイト」(1991年)を見ればわかる通り、1924年公開のハリウッド映画『バクダッドの盗賊』(The Thief of Bagdad ラオール・ウォルシュ監督、ダグラス・フェアバンクス主演)のイメージのコピーからほとんど離れられず、連綿と西洋のオリエンタリズムの片棒を担いできたのです。

楊海英さんの『モンゴルとイスラーム的中国』(文春学藝ライブラリー 2014年)を読んでもわかると思いますが、モンゴル語圏のイスラームを扱うというのは結構複雑な問題で、職業的研究者でも少し腰の引けるようなセンシティブな課題なのです。

ところが、『VIVANT』では、そんなことにはお構いなしに、1960年代ハリウッド映画並みに単純化された世界観と、ステレオタイプのイメージが提示されます。

もし、誰かが「モンゴル人のムスリームがサウジ風の衣装を着用することがあるだろうか？」と首を傾げても、「いやいや、その辺りのことはわたしたちも十分に分かっていますが、そこはそれ、エンタメですのでねえ、短時間で物語を理解してもらうためにはステレオタイプ理解で分かり易くないと、ストーリーが追えませんからね・・・」とかいう反応が返ってくることは誰にも想像できてしまいます。

当今、ジーンズの上にまわしをつけて、浴衣に肩衣つけて、文金高島田に結って、隈取して、バグ

パイプで越天楽を演奏しようと文句を言われる筋合いはありません。しかし、「月の砂漠」的な常套的イメージはともかく、オリエンタリズムのお手本のような映画『アラビアのロレンス』(Lawrence of Arabia 1962年)へのオマージュ的な映像を安易に使い、テロリストを本質化してしまう姿勢、あるいは、GPS を駆使する牧民がいるというような事実は無視して、「遊牧民はスマホをもっていない」と断じるような誤ったステレオタイプの世界観の拡散は、支配の道具になることを忘れてはならないのです。

安易なステレオタイプの再生産は、中央ユーラシアの歴史への正確な理解を欠くだけでなく、現在進行中の政治的不安定の元凶である、nation state と西洋支配の歴史的問題を覆い隠して、真の加害者と被害者の関係をミスリードすることにつながるのです。

将来の市場としての中華社会への配慮か、中華人民共和国版図内のムスリムやキリスト教徒、多くのエスニック・グループの問題には敢えて触れず、武装集団＝ムスリムとして描いて見せるのは、9.11直後のブッシュ政権なみの単純化だとの批判を受けてもしかたがないところでしょう。

テロリストという言葉を使えば危険です。幕末、英国公使館焼き討ち事件の際のイギリス人から見れば、高杉晋作の影響下にあった伊藤博文はテロリストだし、韓国統監だった伊藤博文を殺した安重根は日本から見ればテロリストですが、韓国からみれば民族の英雄です。モンゴル国の国際的環境活動家ムンフバヤルは、ウラン採掘に関する国際的な契約の成立を目前に控えた時期、テロリストとして、懲役21年を宣告されました。

雑草という本質をもつ植物がないように、テロリストの指すものは立場によって異なるのです。

地政学的、歴史的事実の変更の他に、宗教的リテラシーへの配慮を欠く設定が、架空の国バルカの内戦状況の説明に登場します。

これは、警視庁公安部外事課の会議室で、バルカの内戦状況と別班の任務について説明する場面と、悪の組織に乗り込んだ主人公にノゴーン・ベキたちが説明するバルカの紛争の歴史に登場します。

ノベライズ本のノゴーン・ベキ側からのバルカ人の説明には、「ご存じのとおりバルカという国は異なる宗教を信仰する四つの民族が暮らす多民族国家です。キリスト教のロシア系。仏教のモンゴル系、社会主義を信奉する中華系、アッラーをあがめる《イスラム系》⁷⁾」となっていますが、放送された画面では、公安の会議室でのスライドと同じ、「カザフ系民族 イスラム教」というタグが現れます。

現代カザフスタンにとって喫緊の課題は、カザフ人のマイノリティー化を防ぐために国外のカザフ人をいかに国内に呼び込むかということであって、宗教問題ではありません。

活字でカザフを名指しすることを避けているノベライズ本は、「～を信じる～系」という言い方で3つの民族を並べた後、「イスラームのイスラーム」と同語反復してしまっています。ユダヤ教を信じるユダヤ人ということ言うことは可能ですが、それは、ユダヤ教を信じないユダヤ人とか、キリスト教徒に改宗したユダヤ人等の存在を前提としています。

イスラーム教を信じるイスラームとか、イスラームからキリスト教に改宗したイスラーム人とか言えるでしょうか？シリア人とインドネシア人とウイグル人をイスラームとまとめることはできても、ロシア系、モンゴル系、中華系のカテゴリー区分に相当しないはず。ソ連時代のロシア人はキリスト教徒で、中華人民共和国の漢人社会を共産主義思想でまとめるのは余りに乱暴です。

モンゴル人＝仏教徒ではありません。2024年2月現在の米国CIAのThe World Factbookの示す

7) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年)195頁。

2020年現在の統計では、仏教徒51.7%、ムスリム 3.2%、シャマニスト2.5%、キリスト教徒 1.3%、その他 0.7%、無宗教40.6% (2020 est.) となっています。ロシアの場合、ロシア正教徒15-20%、ムスリム 10-15%、ロシア正教以外のキリスト教徒 2% (2006 est.) となっています。『VIVANT』の設定の1970年代末から1980年代中頃とは言えば、ソ連とモンゴル人民共和国と中華人民共和国の時代です。そもそも、当時の政治体制下で厳しく禁じられていた「宗教」を軸とする民族戦争が起こるはずもないのです。

ちなみに、CIA は2021年現在の中国の宗教事情を民間宗教 21.9%、仏教18.2%、キリスト教徒 5.1%、ムスリム 1.8%、ヒンドゥー教徒 0.1%、ユダヤ教徒 0.1%、その他0.7%、無宗教 52.1% としており、過去も現在も中国人は「 Kommunismus」を宗教に準ずるものとして信じているとは言えません。

民族と宗教は等号で結ばれるものではありませんし、シベリアから中央ユーラシアにかけて、かつて、また現在も、ロシアや中国、あるいはヨーロッパが恐れるのは、大日本帝国が軍事的に利用しようとした汎モンゴル主義や汎ツラン主義の台頭です。

モンゴル・チュルク(トルコ)系の複数の集団が存在する仮定でのバルカ国でのテロ行為が専らイスラーム武装勢力からもたらされるという印象づけ、そして、その原因を安易に宗教対立とまとめるご都合主義的な設定は、バルカ(モンゴル)に対する日本の優位性を語るノゴーン・ベキの次のようなセリフにつながっています。

「日本では古くからあらゆるものに神は宿っていると考えられてきた。神はひとつではないという考えがあることで、相手の宗教にも理解を示し、違いを超えて結婚することもする。日本には考えの違う相手を尊重する美徳がある。」⁸⁾

残念ながら、日本人は特別に宗教的に寛容なわけではありません。神学者の森本あんりさんの言葉を借りれば、「日本人は宗教的に無関心」なのです。勿論、無関心でない時期には、とびきりの不寛容さを発揮してきました。折しも、2022年から2023年にかけては、元和の大殉教400年記念の年でした。母親と幼い子供を一緒に柱に縛りつけ、笑いながら焼き殺すといったことが公開の場で行われていたのです。江戸幕府が倒れても宗教弾圧は続き、明治憲法発布後も何度も起こり、第二次大戦前の奄美で起こった弾圧は苛烈を極めました⁹⁾。しかし、世界中で知られているそれらの事実についてでさえ、日本の学校で詳しく教えられることはありません。だから、いまでも、イスラーム教徒やキリスト教徒が地鎮祭への出席を求められたり、自治会から氏子でもない神社への寄付を強制され、それを拒否すると、宗教的不寛容だと詰られたりするといったことが毎日のように起こるのです。

自らのIQの高さを誇るノゴーン・ベキの発言は、宗教(religion)と霊性(spirituality)、アニミズムと多神教、汎神論との区別もろくにつかず、朝廷の儒仏神融合の政治イデオロギーや、近代の教派神道や国家神道についての分析的な理解もなく、スパイにとって常識である、近代における「宗教戦争」の本質が宗教教義論争と別の利害に基づいているという最も基本的な知識をも欠いています。

何故、こんな安っぽいセリフが、いかにも重々しく語られるのでしょうか。元公安部外事課スパイにしてテロリスト集団の首魁の信条を、偽サムライや偽保守主義者のカリカチュアとして描くことで、何を示したかったのでしょうか？

偽伝統主義者ベキの語る古き日本の「考えの違う相手を尊重する美徳」はドラマの一体何処に見られ

8) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年) 277頁、TVも同じ。

9) 奄美の宗教弾圧については、宮下正昭『聖堂の日の丸-奄美カトリック迫害と天皇教』(南方新社 1999年)。

るでしょう。日本の公安警察が「日本、諸外国もご子息を追うことはないでしょう。ただ国内、バルカ警察は違います。しかし、そこはわたしが抑えてみせます」と豪語し、自衛隊の別班が、「ここをどこだと思っているんだ、バルカだぞ」と言われて「そんな恫喝に日本は屈しない」と切り返す態度の中にはその欠片もみられません。そうした傲慢な態度の裏にはどんな歴史が隠れているのか、2つ目のお題にうつることにしましょう。

2 烈士の碑 あるいはスパイ神社

『VIVANT』の中で日本を舞台とする場面では、神社が度々登場します。

主人公のルーツである出雲大社の他に、神田明神がはっきりと分かる形で出て来ますが、将門が祭神になっている神田明神も出雲系の神社とされているので、アマテラス系による非アマテラス系カミのための神社です。朝敵側へ配慮を払う神社であるということと主人公が冒頭にイスラームやキリスト教の神の名と天照大神を並列させるところなど、なかなか興味深い設定です。

『VIVANT』では、対立する日本の情報組織、警視庁公安部外事課と陸上自衛隊の情報部別班は互いに相手を監視しています。靖国神社が大きくフレームされていないのは、現実の警視庁公安部が、三島事件のようなクーデター計画等をチェックする役割も担っており、自衛隊員の靖国参拝の動きにも注意を払うことが既に世間に知られているからかもしれません。ちなみに、警視庁公安部の前身は、所謂特高警察ですが、その総元締めは内務省、内務省の中には神社局というものがありました。

いずれにせよ、靖国神社の名前を表に掲げてなんらかの意味付けをするのはテレビ局としては剣呑ですから、「触らぬ神に」なんとやらということでしょう。

幾つかの裁判で知られている通り、自衛隊員は勤務中に亡くなると、嫌でも靖国神社に合祀されてしまいます。これは、政教分離の原則からも、祀られたくない遺族にとっても大きな問題です。しかし、大日本帝国時代には、遺族たちが合祀を切望したのに祀られない人たちがいたのです。大阪大学箕面キャンパスにある「烈士之碑」は、そんな人たちに纏わる重要な歴史記念物なのです。

烈士之碑は現在、大阪大学箕面キャンパスの時計の裏の目立たぬ場所にありますが、その前は、箕面市の別の場所にあった大阪外国語大学キャンパスの同窓会会館の横に移設されていました。もともとは、大阪市の上本町八丁目にあった大阪外国語大学、その前身である大阪外国語学校の正門近くにあったものです。

大阪外国語学校という学校は、1920年に海運業者林竹三郎の妻林蝶子から新設費100万円の寄付を受け、1921年末の勅令により設置、翌1922年から学生への授業が始まった国立の学校です。

誕生の1921年といえば、奇しくもモンゴルが1911年の独立後の日本を含む大国の干渉と混乱の10年を経て、ボルシェビキ勢力と組んでようやく活仏ボグド・ゲゲーンを元首として再び独立国となった頃、昭和天皇が皇太子としてヨーロッパ歴訪を行った年でもあります。

第一次世界大戦の戦後期、次の大戦への火種をかかえつつも軍縮を試み、日本は、大正デモクラシーの最中、国際化の時代を迎えていました。

学校のキャッチフレーズは現在の大阪大学外国語学部でも使われている『EX ORIENTE LUX ET PAX』。「光と平和は東方から」というラテン語です。校歌もそういう気分に溢れていました。(大阪外国語大学も同じ校歌でしたが、戦時中の外事専門学校時代はこの校歌を歌わなくなっていました。)

歌詞は、「世界をこめし戦雲ようやくはれて 東の空に暁の明星ひとつ これぞ大阪外国語学校 建てよ建てよ 平和の旗 叫べ叫べ 愛のことば 輝かせ 文化の光」

この歌詞を書いたのは、東京外語出身の松永信成(1892-1924)露語部初代教授です。その当時、国立学校の校歌に「叫べ、愛のことば」と書くことができたのは、ロシア文学の翻訳者であり、自身も詩人であったキリスト教徒、松永教授なればこそだと思います。

モダンなのは校歌だけでなく、制服も詰襟ではなく、スーツタイプのものでした。

大阪大学外国語学部の人たちにも、是非、覚えておいてほしいのですが、最初、大阪外語は、平和と博愛のための学校だったのです。

しかし、開学間もなくそれが一変してしまうのです。

1923年に、蒙古満州および、これに関係のある諸方面に関する研究調査を目的とする満蒙研究会なるものがつくられます。「ああ実に満蒙こそ我が国民の死活問題たるの地なり。蒙古部の有志、相謀りて蒙古の研究を目的とする満蒙研究会を設立せり」というわけです。

こうした動きの中で、1931年2月に、学生たちは中目覚校長の排斥運動を行うのです。この始まりは代返がどうのという実に詰まらない話です。それが学生ストライキという騒動になり、校長の罷免要求にまで拡大します。中目校長は有名な地理学者にして言語学者。樺太のギリヤーク研究が有名で、もともとドイツで研究していて、多言語に通じたエスペランティストでもありました。大阪外語の東洋語重視を打ち出したのもこの人です。当時としては、ある意味、リベラルな人だったと思います。排斥の急先鋒は蒙古語の人間だけではなく、英語部をはじめとする西洋語にも多かったのです。

1931年の11月には、「愛国心に燃ゆる」若き六百人の学徒は連盟理事国代表に声明書を発送します。外語ですから、いろんな言語で国際連盟の理事国代表に声明書を送ったのです。「満州事変は日本に非はない」と国際連盟の代表に声明文を送る学生大会があったのです。

満州事変後、大阪外語の蒙古語に、爆発的に受験者が集まり、すごい倍率になってしまいました。学生の学習意欲も高まり、特務機関その他で活躍できるようになると、学科は「わが世の春を謳歌する」という事態になったわけです。そして、1936年「綏遠事件」の頃になると大阪外語の卒業生たちの中から犠牲者が相次ぎます。¹⁰⁾

大阪大学にある烈士之碑を、一般戦争犠牲者に対する慰霊の碑だという風に説明する人もいますが、少なくとも誕生の意義は全く違います。祀られねばならなかった人々は、まずもって、軍籍のない、特殊工作員だったのです。

トム・クルーズ主演の『ミッション・インポッシブル』(Mission: Impossible)という映画をご存じでしょうか。あの映画の元は1960年代のTVシリーズですが、物語の冒頭、秘密工作員リーダーへ、自動消滅するテープで指示が与えられます。テープの消滅前、必ず、次のような言葉が流れます。

As always, should you or any of your IM Force be caught or killed, the Secretary will disavow any knowledge of your actions.

諸君が捕まったり、殺されたりしても当局は一切関知しないからそのつもりでというわけです。こうしたアメリカTVドラマに刺激されて作られたチャンバラTVドラマ『大江戸捜査網 アンタッチャ

10) 大阪外国語学校、大阪外国語大学の歴史については、大阪外国語大学同窓会(編)『大阪外国語大学70年史・資料集』1989年、大阪外国語大学同窓会大阪外国語大学70年史編集委員会(編)『大阪外国語大学70年史』1992年等の資料があり、本講義も直接関係者から聞いた話の他は、主にこれらの資料によっている。なお、現在の大阪大学外国語学部の公式WEBサイトには烈士之碑に関する記述は全く見当たらない。(最終確認2024年3月13日)

ブル』のナレーションで言えば、「御下命 如何にても果すべし 尚 死して屍拾う者なし」ということになるわけです。

特殊任務を隠密裏に行う工作人員は、軍の特攻隊員とは全く違うものです。「政府や軍の機関の命令によって活動しているとは、あなた方も、政府や軍も口がさけても言えませんよ。それを分かっての任務ですよ」という前提です。当然、日本のスパイ、海外での工作人員たる特務関係者は、天皇の正規軍の犠牲者のための靖国神社には祀られません。

それを承知の本人は納得していても、遺族や仲間は黙ってられない。「兵隊は戦死すれば靖国神社にまつられるのに、満州国の建国に献身するものが、なぜ神にまつられないのか。外語神社をつくれ」と国に求めたけれど、それは許可にならなかった。それなら、自分たちで「烈士之碑」を建てるぞという話になって、日中戦争が始まった頃に募金運動を開始して、1938年6月に除幕式を行いました。

いま大阪大学の外国語学部にある烈士之碑は、靖国神社には祀られない特務機関員を顕彰する、謂わば、「外語出身のスパイのための神社」だったわけです。

この碑には、蒙古聯合自治政府の徳王自らも参拝していますから、彼ら「烈士」の行動は建立当時から「公然たる秘密」でした。日米開戦後には、最初の経緯も忘れられかけはじめていたようですが、1942年に入学して43年には陸軍に取られてしまう司馬さんの在学時代の写真の背景にも烈士之碑がしっかりと映っています。(大阪外国語大学同窓会咲耶会 会報咲耶 No.10 (1999)の表紙。)また、1943年11月には、烈士之碑に新たに18柱が合祀されたとの記録があります。

司馬さんが在学当時の蒙古語科の雰囲気は想像に難くありません。わたしの在学中の外大にも残っていましたが、校舎には中庭があって、そこに小さな池があったのですが、そこに裸になって座らされたりする。そういう日常が司馬さんには耐え難かったはずです。一部の同期同窓生たちは司馬さんがそれに馴染んでいたと回想していますが、彼に限らず、嫌でも馴染んでいるふりをしていなければ、すこぶる面倒なことになってしまいます。司馬さんを含め、少なからざる学生が同調するふりをしていた可能性は大いにあるのです。それは、司馬さんが『菜の花の沖』の中で、いじめを日本の精神文化のなかでもっとも重要なものの一つとして、ことさら激しく批判していることでも分かるはずです。

1987年、司馬さんは、大阪外国語大学の求めに応じて、「四海への知的興奮」と題する短い文章を書き、「身辺で、大阪外国語大学に入ったひとに出会ったりすると、「いい大学に入ったな」と、心から祝うのである。そこで学ぶ学問は、生涯そのひとを愉しませつづけるはずだということを、私は知っている」と新入学生を祝福するのですが、1991年の『なぜ小説を書くのか』という談話の中では、「この学校はその頃、私の夢を満たしてくれるような内容を持っていませんでした。ひたすら実務的な学問を教える学校でした」と、植民地学に象徴される実学の学校が、嫌で堪らなかったことを語っています¹¹⁾。

外語学校の蒙古語を出たからといって、必ず、満洲や「蒙古」で好い目を見るというわけにはいきませんでした。満鉄の調査部のエリートたちはほとんど東大出で、あとちょっと京都帝大ぐらいの人がいて、東京外語はまだましで5人いるのですが、大阪外語の出身者は、1人しかいない。大阪外国語

11) 「なぜ小説を書くか」『司馬遼太郎が考えたこと 15』(新潮文庫、2002年)88頁。気遣いの人である司馬遼太郎の面目躍如たる「四海への知的興奮」は、現在の大阪大学外国語学部の図書館にも掲げられており、同大学の宣伝にもしばしば使われる。現在の大阪大学の学生や教職員には、大阪外国語学校や国立2期校時代の大阪外国語大学の鬱屈は想像しがたいかも知れないが、「四海への知的興奮」には、「大学はプラクティカルな語学教育や国策的実学教育の場に墮してはならない」という強い警告が含まれていると考えるべきだろう。

学校蒙古語部の一期生であった精松源一さん(故大阪外国語大学名誉教授)でさえ、最初は満鉄に行くと思ったけどダメだったと言っていたくらいです。

外語卒の「烈士」たちは、帝大出のエリートは滅多にやらない「特務」という汚れ仕事を進んで引き受けていたのです。その「特務」の仕事とはどんなものだったのでしょうか。

「特務」の実際については、後藤富男「善隣協会は何をやり残したか」(善隣会編『善隣協会史：内蒙古における文化活動』(日本モンゴル協会1981年、概観6頁)から、少し長くなりますが、引用しましょう。

この協会は、定款によれば「人道的見地ヨリ比隣諸民族トノ融和親善ヲ図リ、相互文化ノ向上ニ寄与スル」ことを目的として、この年一月、財団法人として東京に設立された文化団体である。比隣諸民族とはあるが、当面のねらいはモンゴル民族であり、しかもチャハル、スイユアン両省にわかれて中国の主権の下にある内蒙古がその対象となっていた。

・ ・ 中略 ・ ・ 班の構成員として、このほかなお重要なものに渉外工作員があった。

彼らの任務は、いわば協会活動の耳目となって、それぞれ担当する地区をたえず移動し地域の特性や治安の状況、牧民の分布や生活状態などを調査し住民や家畜の疾病をはじめ、日常生活におけるさまざまな相談相手ともなり、必要に応じて協会の診療機関などにこれを送ってよこすことなどであった。それには何よりもまず現地人の生活習慣にとけこみ、彼らのことばを自由に駆使できるとともに、親しい友人として信頼を勝ちえることが先決条件であった。班には旧制の中学校を卒業したばかりの青年が何人かずつ配属されていたが、さっそくひとりひとり付近を遊牧する牧民のアイル(帳幕)に預けられて、モンゴル人としての生活にはいったのである。半年あまりもたって、彼らがふたたびあらわれたときには、モンゴルの服装もすっかり板につき、弁髪になっていた者も多かった。住民の日常生活には意外にやかましい礼儀作法があり、歩きぶりのようなちょっとした身のこなしにも、なかなかまねのできない独特のくせがある。そうしたささいな身のこなしまで、若者たちは熱心に学んで、モンゴル人になりきろうとしたのであった。

これら工作員が各地から寄せた調査報告にはきわめて貴重なものが多い。彼らはそれぞれの地区を足で歩いて、ラマ寺廟の沿革、構造、勤行、経済とか、漢人行商の取引の実態、商品の価絡や種類とか、牧民の家畜所有や牧畜技術など、かつて行われたことのない遊牧民生活の実態調査を、木箱を机としロウソクをたよりに、なまなましい記録につづって、これを支部に送りとどけてきた。

だが、なによりも強調しておかねばならないのは彼らのすべてが、現地の住民に心から親愛の情を抱いて、例外なくその友人となったことである。工作員などというと、ともすれば政策的な意図を感じるが、善隣協会のこれらの青年たちにかぎって、そうした陰影はまったくなかった。これはややのちの話であるが、太平洋戦争の形勢が日に日に不利となるにしたがい、満洲国はもとより蒙疆における日本の民族政策はしだいに余裕を失って、露骨な圧制に転じた。重要なのは戦争遂行のための家畜資源であり、モンゴル人ではなくなったのである。そのときこれらの青年たちは、「奥地」モンゴル人の代弁者となって、出先の軍部や張家口政府に、しばしばどなりこんで激論をたたかわす風景が見られ、彼らは「土民軍」と呼ばれて厄介視されたのである。

若い頃、わたしは、父と同世代の元特務という方々が苦手で、聞き取り調査のようなことをしませんでした。興亜義塾出身のKさんという、(とても有名な方で自分の活動についての著書もあります

し、お名前をだしてもいいのですが、ここはちょっとそれっぽく、Kさんとしておきましょう)、元スパイだった方に会ったことがあります。モンゴル語はとても上手かったです。下手な者がいうものなのですが、モンゴル語の上手な話し手を沢山見てきましたが群を抜いていました。居合わせたモンゴルの人たちが「あの人は、どこのモンゴル人？」と尋ねてきたことをいまでも覚えています。語彙の豊富さとか、発音の正確さとかだけではなく、モンゴル語を使う時の息遣いや所作がモンゴル人そのものなのです。

この方も善隣協会の職員は、平和部隊などのような米国団体の人たちに似て、少なくとも最初のうちは、信じられないほど純真で理想に燃えており、後には軍部と対立することになったという趣旨の回想をしています。「モンゴル人の代弁者」という気分は、あながち、自己弁護のためだけの発言ではないでしょう。興味深いことに、Kさんは、戦後、イギリスやアメリカの情報機関のために活動をしています¹²⁾。

善隣協会の横に、西北研究所というものが作られました。これは蒙疆地区のイスラーム事情調査のためにつくったものですが、新疆側のイスラームと日本軍が提携して、中国を牽制する目的があったのです。日本のモンゴル研究や、イスラーム研究、生態学や文化人類学が出来上がってくる過程でのこうした組織の果たした歴史的な役割を忘れてはならないと思います。

フランスの文化人類学がアフリカなどの植民地体験から生み出されたように、日本の学問もその旧植民地体験から生まれてきたものです。今西錦司博士のような人たちによって、戦後の京都大学人文科学研究所のベースもできあがるわけです。当時西北研究所の一番手が梅棹忠夫さんだったわけですが、彼らはエリートですから、自分がスパイになるわけではなく、特務の人を利用して研究する側の人たちです。敗戦後の混乱、満洲の日本人がわが子さえおいていかねばならない状況下に陥る中で、ごっそりと研究資料を持ち帰ることすらできたのです。だから、特務の人たちのやってきたことに余り批判的な言説は残していません。ただ、磯野富士子さんは違いました。西北研究所に属しながら、現地の普通のモンゴル人たちの中に入って、一緒に生活してモンゴル語とその文化を学んだ彼女は、「男の人たちが、自分たちが調査に行くときにモンゴル人の人たちを押しつけて、自分たちが調査員として平気で上座に座るような、そういうやり方はおかしい」とずっと言い続け、終戦後の混乱の中で特務の人たちのとった身勝手な行動も痛烈に批判しました。

烈士之碑は、現地の人々のために働くことと自国の国益のために働くことが一致することを夢見て、現実にはその乖離に直面し、葛藤に苦しみつつ、国益のために犠牲になり、自国から顕彰されることのなかった人々が現実にいたことをいまに示しています。

『VIVANT』の描く世界は、烈士之碑の歴史と直接つながっているのです。

自衛隊の闇の仕事をしている主人公の所属はあくまで一般企業で、その「軍籍」が明らかになることはありません。主人公の父親は、元警視庁公安部外事課のスパイで、援助目的を隠蓑に国益のために派遣された人物です。それらの人たちが、モンゴル語を話す現地の人たちの利益と、自らの国益の板挟みになるという設定は、『VIVANT』というドラマのために生み出された目新しいフィクションではなく、日本の歴史的現実そのものなのです。

上本町八丁目のキャンパスから、大阪外国語大学箕面キャンパスへ移設され、同窓会会館の横に鎮

12) 戦後のCIA等米国情報機関における元大日本帝国スパイのリクルートについては、ほぼティム・ワイナー著『CIA 秘録 上下』(文藝春秋、2008年)等に述べられている通りであったと想像できる。

座していた烈士之碑の土台部分は、大阪大学箕面新キャンパスへの移転に際して破毀されました。その新キャンパスは、日建連表彰 BCS 賞なるものを受賞しており、その受賞理由には、「エントランス周りには、地域との接点となる場が設けられ、大学と地域とが多様な活動を展開し、まちづくりに大きく貢献している。一方、1階北側のエントランスには、25言語のメッセージを刻んだ石碑が象徴的に設けられ、さらに旧キャンパスの遺産である「烈士之碑」「世界時計」「鉄扉」がこの地における長い歴史の継承を表現している」(<https://nikkenren.com/kenchiku/bcs/detail.html?ci=1015>)とあるのですが、烈士之碑は世界時計の影に隠れて、エントランス正面からは見えません。現在の大阪大学関係者のWEBサイトに見られる烈士の写真は、石碑の正面のものだけで、その由来を記した裏面の碑文を判読できるものが見当たりません。明らかに、見せたくない歴史を人々の目から遠ざけているのです。江戸時代の知の拠点、懐徳堂の流れを汲むと謳う大阪大学ですが、懐徳堂の天才町人学者富永仲基が厳しく批判した日本人の何でも隠したがる体質から全く抜けきれていないのです。

烈士之碑が示すものは、忘れ去られてもよい過去のことではありません。

2023年現在、自衛隊はモンゴルでの道路構築教官育成及び道路測量に係る技術指導任務に関わる事業を展開しています。そして、こうした事業のために、モンゴル語のできる人材を公募しました。最初は、後述する安倍首長のモンゴル訪問や、特定秘密保護法が通った後、2014年頃くらいだったかと記憶しています。

結局は応募を見送った人から、その理由として、「採用に際して求められる友人・知人リストに挙げた人々が知らないうちに、個人情報をチェックされることへの不安があった」と聞いたことがあります。日本政府は、2024年2月27日、民間人を含め経済安全保障上の重要情報を扱う人の身辺を国が事前に調べる「セキュリティークリアランス(適性評価)制度」を導入する法案を閣議決定し、国会に提出しました。『VIVANT』が映像化して見せた通り、民間人の個人情報も合法的に丸裸状態となります。

情報活動の担い手は、ショーン・コネリーの007や堺雅人の別班員のようなものだとはいりません。Kさんの言うように、CIAの仕事の多くは、現地で働いている様々な機関の人たちが提供する情報に基づいていると言われています。現代の日本の場合も、例えば、JICAのメンバーとして純粋な志によって途上国のために働いている人たちが現地で集めた情報が、本人の意図しない目的で使われることもあり得るのです。

情報活動のそうした側面は、一般市民がスパイとして利用されるだけでなく、まったく無関係な人間がスパイ扱いされる事態を引き起こしてきました。

満洲事変、満洲国建国からノモンハン戦争という流れの中で、モンゴル人民共和国の多くの人々、とりわけ、インテリゲンチヤが日本のスパイという容疑で逮捕されたのです。その時期は、モンゴル現代文学の黎明期にあたりますが、モンゴル現代文学の立役者たちも、日本の水道施設について褒めたといった些細な理由で、スパイ容疑で投獄されたのです。拷問を受けた人、命を落とした人、命を失わないまでも、社会的に抹殺された人もいます。内モンゴルでも多くの犠牲者がいました。日本の教育システムの中で、モンゴル文化の担い手となった人たちが、戦後、日本の協力者やスパイの嫌疑で中華民国、中華人民共和国の敵と見なされるようなことも起こりました。

モンゴル人民共和国と日本の国交が樹立された1972年以降、冷戦終結を迎えるまでの間は、日本人は警戒すべき監視対象でした。80年代の初め、ウランバートルの街を一人で歩いていて不安を感じ

ることは全くありませんでしたが、目つきの鋭い人がずっとあとをつけてくるのが分かりました。友人がホテルの部屋まで来ることは稀でしたが、部屋まで入れる人も、会話に入る前、ラジオの音を最大音量にして盗聴への対応をすることがありました。ベルリンの壁が崩れる2年ほど前には、ネグデルの牧畜調査中の日本人研究者(自他共に認める英語苦手タイプ)が英国のスパイであるかの如き記事が新聞に掲載されたりするようなこともありました。

スパイであろうと、なかろうと、現地の人々の利益のために行動しつつ、自国の利権を最大化しようとする行為がもたらす大きな悲劇、とりわけ、共感なき親近感にもとづく、上から目線の国際協力がもたらすものについて、最後の、そして最も重大なお題である、COP28についてお話しすることにしましょう。

3 COP28 国益と共通善

2023年11月30日から12月13日年にかけてCOP28(国連気候変動枠組み条約を結んだ締約国会議の28回目)が、UAEのドバイで、開催されました。

開会に先立つ10月4日、ローマ教皇フランシスコは、緊急の『使徒的勧告』を出し、以下のように期待を表明しました。

会議の参加者たちには、特定の国や企業の短期的な利害よりも、共通善と子どもたちの将来とを考慮できる戦略家であっていただきたく思います。政治の恥でなく、政治の高貴さを証明していただきたいのです。力ある人々に対し、あえてかの質問を繰り返します。「緊急かつ必要な際に介入できなかったと記憶に残るような権力に、なぜ今しがみつきたいのでしょうか。」¹³⁾

教皇は、その文書に『ラウダーテ・デウム』(神を賛美せよ)というタイトルを選んだ理由を「人間が神に取って代わろうとすれば、人間自身にとっての最悪の敵となるから」だと説明しています。

教皇として誰も使ったことのない、エコロジーの守護聖人、アシジの聖フランシスコ(1182-1226)の名を選んだ教皇は、2015年に、教会史上初めて、環境問題を正面から取り上げた『回勅 ラウダーテ・シ』を発出し、向かうべきゴールとして以下の7つのことを世界の人々に求めました。

1 地球の叫びへの応答、2 貧しい人々の叫びへの応答、3 エコロジカルな経済、4 サステイナブルなライフスタイルの採用、5 エコロジカルな教育、6 エコロジカルな霊性、7 コミュニティーのレジリエンスとエンパワーメント¹⁴⁾。

回勅から8年を経て、世界の状況はほとんど改善されず、むしろすべてが後退しているように見えました。教皇は業を煮やし、緊急の勧告を出して、COP28への強い期待を表明したのです。

しかし、残念ながら、COP28が教皇の期待に応えることはありませんでした。むしろ、彼の思いと反対のことが起こりました。なんと、COP28の決定文書の中に、原子力利用が明記されたので

13) 教皇フランシスコ(著)、瀬本正之(翻訳)『使徒的勧告 ラウダーテ・デウム——気候危機について』(カトリック中央協議会 2023年)42頁。

14) この回勅は以下のサイトから日本語訳全文を読むことができる。 https://www.vatican.va/content/francesco/ja/encyclicals/documents/papa-francesco_20150524_enciclica-laudato-si.html
そのアクションプランと7ゴールについては、以下の英文サイトが分かりやすい。
<https://laudatosiactionplatform.org/laudato-si-goals/>

す¹⁵⁾。COPの合意文書において、原子力が気候変動に対する解決策の一つとして正式に明記されたのは今回が初めてです。

COP28会期中の12月2日、日本をはじめとする米英仏加など22か国が、「パリ協定」で示された目標の達成に向け、世界の原子力発電設備容量を3倍に増加させるという宣言文書に署名しました。

署名国は、日本のほか、アラブ首長国連邦、ウクライナ、英国、オランダ、ガーナ、カナダ、韓国、スウェーデン、スロバキア、スロベニア、チェコ、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、米国、ポーランド、モルドバ、モロッコ、ルーマニア、そして、モンゴルです。

宣言は、最高水準の安全性、持続可能性、セキュリティおよび核拡散抵抗性を保持しつつ、責任を持って原子力発電所を運転すること、長期にわたって責任を持って使用済み燃料を管理すること、新しい資金調達メカニズムなどを通じ、原子力発電への投資を奨励すること、原子力発電所が安全に稼働するために、燃料分野を含む強靱なサプライチェーンを構築すること、技術面で実行可能かつ経済性がある場合には、原子力発電所の運転期間を適切に延長させること。原子力導入を検討する国々を支援すること等、さらに2050年までに世界の原子力発電設備容量を、2020年比で3倍とする目標を掲げるだけでなく、小型モジュール炉(SMR)や先進炉の導入拡大も謳っています。

12月6日には、ロシアも、モンゴルのSMR計画に言及しました。ロスアトムは、2028年に試運転が予定されているヤクートの小型モジュール型原子炉プロジェクトを強調するとともに、世界中で設計段階の小型モジュール炉プロジェクトが70件以上あり、6月にロスアトムとモンゴルの企業ダヤン・ディアク・エナジー社は、モンゴルのエネルギー自立を確保することを目的として、原子力、風力、水力発電の分野におけるプロジェクトの共同実施に関する戦略的協力に関する協定に署名したことを明らかにしています¹⁶⁾。

これらの方向性は、2021年あたりから、国際エネルギー機関(IEA)等で既に決定済で、2023年には動きが活発化し、世間にも見えるようになりました。

5月には、フランスのマクロン大統領がモンゴルを訪問し、資源国モンゴルからの重要金属の供給を通じてエネルギー主権強化のために協力することを決定して、気候変動の影響軽減への貢献を約束し、モンゴルでウラン鉱山を開発しているフランスのオラノ社とのパートナーシップの重要性を強調しました。10月、モンゴル側ではフランスへの30年間のウラン供給プロジェクトが報告されています。

同年6月、読売新聞は「モンゴルと急接近する米韓、重要鉱物の「脱中国依存」…地政学的な重要性高まる」と題する記事を掲載して、米国は重要鉱物を巡る3か国での連携をテコに、中露を見据えたモンゴルへの影響力拡大を図る考えだと伝え、米国・モンゴル・韓国重要鉱物協議は、世界の重要鉱物需要に応える上でのモンゴルの重要性を強調するとともに、課題や機会、連携や情報交換、共同事業の実施について議論を交わし、今後、各国の専門家が議論のフォローアップを行う予定だと伝えて

15) 教皇フランシスコは、2019年11月、原発はひとつたび事故となれば重大な被害を引き起こすとして「完全に安全が保証されるまでは利用すべきではない」と明言している。

これは、東京からローマに戻る特別機の中での記者会見での発言で、原発事故に関し、東京電力福島第1や1986年のチェルノブイリを例に挙げながら、いつでも起こり得ると指摘し、「甚大な災害が発生しない保証はない」ことを強調した。核兵器の使用だけでなく保有についても「倫理に反する」と改めて非難し、世界で核保有が続けば偶発的な事故や政治指導者の愚行により人類が滅びかねないことへの警鐘を鳴らした。(日本経済新聞2019年11月27日等を参照。)

16) ロシアの動きについては以下のサイト等を参照。

<https://www.world-nuclear-news.org/Articles/SMR-concept-project-presented-to-Mongolia-by-Rosat#:~:text=Mongolia%20has%20substantial%20known%20uranium,sites%20have%20been%20under%20consideration>

います。

これら各国の動きに連動して、日本では、2023年2月「グリーントランスフォーメーション実現に向けた基本方針」において、国際連携を通じた研究開発推進、強靱なサプライチェーン構築、原子力安全・核セキュリティ確保にも取り組むことが閣議決定されました。

そして、2023年9月には、岸田総理がニューヨークでモンゴルのフレルスフ大統領と会談し、福島第一原発の処理水放出について説明、モンゴル大統領は日本の立場への支持を表明したのです。

NHKのニュースは、この会談の折、両首脳がモンゴルをロケ地としたTVドラマ番組などを通じて、両国民の相互理解が深まり、観光交流が活発になることに期待を示したと報じました。

TBSのニュースではなく、NHKですよ。このドラマとは、勿論、『VIVANT』のことです。なんと、日本の総理大臣が、公式に存在していないはずの自衛隊の海外情報機関が国外で活躍する話を持ちあげたのです。

なるほど、これで疑問が解けましたね。

バルカ国首都のはずの場所の風景が、ほとんど加工されず、ウランバートルそのものだったり、地理的に離れたモンゴル名所が絵葉書セットのように、すぐ隣あっているように出てきたりするの、『VIVANT』の聖地巡礼ツアー用の仕掛けだったという訳です¹⁷⁾。

そして、「日本の公安なら世界の諜報機関の中で最も公正な判断をしてくれます。」¹⁸⁾という主人公の唐突な台詞が登場する理由も見えてきます。自衛隊情報部別班員の主人公が、自分の属した組織に裏切られ見捨てられ、組織を恨んでいる元公安部外事課スパイの父親に向かって言う台詞としては間の抜けたものですが、「表の組織、元大日本帝国内務省の特高警察である公安部はちゃんと政府の管理下にあり、公式に存在を認めていないからシベリアンコントロールの利かない別班も、確かに存在していて、裏の組織の彼らも国家利益を守るために、非合法な手段も厭わず、懸命に働いています。そして、両者は互にチェックしあいながら、補完的に機能して、核問題等の国益を守っていますよ」と国民に広報しているわけです。

『VIVANT』で公安部外事課員が語る「日本政府の上に立つ人間は、バカなふりをして意外としっかりやったりするんだ」¹⁹⁾という台詞は、まさに、国益をめぐるこのドラマが、意図的に「《バカなふり》をしている政府のめざす国益」に沿って作られていることをアピールしているわけです。

それを端的に示す場面があります。

バルカの内乱とノゴーン・ベキの関わりが公安部外事課の指令室で説明される場面です。オリエンタリズムについて話した宗教対立の説明の後、彼が危険をおして、現地に留まらなければならなかった日本の国益についての説明があります。

それは、バルカ国の地下埋蔵資源だということです。では、バルカ国の地下埋蔵資源とはなにか？スクリーンに映し出される主な資源は4つ、「銅精鉱 石炭 フローライト コバルト」です。

さあ、このうちのどれが目的でしょう。勿論、フローライト、つまり蛍石です。スマホからAIま

17) 株式会社日本旅行は、TBSの協力のもと、「VIVANT」の撮影が行われたモンゴルのロケ地を巡るオフィシャルツアーを2024年3月28日に発売。在モンゴル日本大使館として撮影に使われた「プーダイホテル」と、主人公が宿泊したクーダンイーストホテルとなったケンピンスキーホテルに宿泊、バルカ共和国の首都クーダンの広場として使用されたスフパートル広場、バルカ国際銀行として使用された国立ドラマ劇場等をガイド、モンゴルの俳優との夕食会などがあるという。

18) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 下』(扶桑社文庫 2023年)266頁、TVも同じ。

19) 福澤克雄原作『日曜劇場 VIVANT 上』(扶桑社文庫 2023年)183頁、TVも同じ。

でなくてはならない半導体を作るために不可欠な鉱物です。米中の対立の激化、台湾有事ともなれば大事ですから、台湾メーカーの誘致だとか、JIC による JSR の買収は民間企業の国有化だとか、経済安全保障だとかの話の聞かない日はないくらいですからね。ドラマはこのフローライトをめぐる、虚々実々の展開となり、最終章に突入するわけです。

実際、モンゴルのフローライト鉱脈は枯渇化傾向とも言われているので、未開発のバルカ国へ期待という設定にはリアリティがあります。しかし、このスライド、どこか変じゃないですか？

バルカ国はモンゴル国とカザフスタンとに国境を接している国でしたよね。

カザフスタンの主要資源はなんだったでしょう。

日本の外務省 HP のカザフスタン共和国基礎データを引用します²⁰⁾。

(1) 石油、天然ガスなどのエネルギー資源、鉱物資源に恵まれた資源大国。石油埋蔵量は300億バレル(世界の1.7%)、天然ガス埋蔵量2.7兆立方メートル(世界の1.8%)(2019年:BP 統計)。また、レアメタルを含め非鉄金属も多種豊富である(ウランの生産量は世界1位(2017年:通商白書)、クロムの埋蔵量は世界1位、亜鉛は世界6位(2019年:米地質調査所)。

では、モンゴル国の鉱物資源の記述はどうでしょう。同じく外務省の基礎データです²¹⁾。

主要貿易品目

- 1) 輸出 鉱物資源(石炭、銅精鉱、蛍石など)、牧畜産品(カシミア、羊毛、皮革など)
- 2) 輸入 石油燃料、自動車、機械設備類、食料品

とありますが、日本の独立行政法人 JOGMEC の金属資源情報によると、2008年段階で、モンゴルのウラン埋蔵量については、IAEA の Red Book によると Identified Resources カテゴリーの埋蔵量は61,950t で世界第14位、で、Undiscovered Resources カテゴリーの埋蔵量は1,390,000t で世界第1位と報告されていました。

ウラン生産量1位のカザフスタン、潜在埋蔵量1位のモンゴルに挟まれたバルカ国にウランが出ないという設定、おかしくないですか？

実は、外務省のモンゴルのデータには、「その他」という項目があり、以下のように記されています。

「モンゴルは、中国とロシアに挟まれ、地政学的に重要な位置を占める。同国の民主主義国家としての成長は、我が国の安全保障及び経済的繁栄と深く関連している北東アジア地域の平和と安定に資する。また、同国は石炭、銅、ウラン、レアメタル、レアアース等の豊富な地下資源に恵まれており、我が国への資源やエネルギーの安定的供給確保の観点からも重要。我が国は、世銀との共同議長の下、1991年9月の第1回から、1997年10月の第6回までモンゴル支援国会合を東京にて開催した他、国際舞台においても積極的に対モンゴル支援のイニシアティブを発揮している。2017年12月策定の対モンゴル国別援助方針においては、大目標を持続可能な経済成長の実現と社会の安定的発展とし、3分野を重点としている((1)健全なマクロ経済の実現に向けたガバナンス強化、(2)環境と調和した均衡ある経済成長の実現、(3)包摂的な社会の実現)。」

20) 引用は、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kazakhstan/data.html#section4> (最終確認 2024年3月13日)

21) 引用は、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/data.html#section4> (最終確認 2024年3月13日)

「石炭、銅精鉱、蛍石など」と「石炭、銅、ウラン、レアメタル」をよく見比べてみて下さい。

意図的にモンゴルのウランを目立つ場所から隠そうとしていることがわかります。

『VIVANT』のバルカ国の地下埋蔵資源のスライドを見たとき、わたしには、画面の後ろに、消えたある一枚の地図が見えました。

それは、モンアトムジャパンが、モンゴルからのウランを入れて、日本の使用済み核燃料をモンゴルに送るという構想を示した地図です。

2011年5月、東日本大震災から時を経て、なかったはずの福島原発のメルトダウンが明らかになって間もなく、モンゴルへ核廃棄物処理場を建設するという日米の構想がメディアに出ました。世論の非難を浴びて、日本政府は、構想自体が存在しなかったかの如く、モンアトムジャパンもその地図もWEB上からも消えてしまいました。その後、日本とモンゴルのEPA成立まで、日本政府や企業が国民向けに出す文書の中からモンゴルのウランの文字が消えるのです。

もし、『VIVANT』のバルカの切り札がフローライトではなくウランだったらどうでしょう？

ノゴーン・ベキがバルカ人の窮民援助のために、未知のウラン鉱脈を発見して、ウラン供給に日本に特権的地位を与えるという話だったら、日本のオーディエンスはどう反応したでしょうか？

カザフスタンはウラン輸出とともに、最も甚大な被ばく被害で知られた国です。四国ほどの面積の核実験場で40年間に、450回以上の核実験が繰り返し行われました。かつて世界で行われた核実験の4分の1近くがこの地域に集中していたと言われていた場所です。中華人民共和国内のモンゴル地域でも核実験が多く行われましたが、その詳細は不明です。

モンゴル人もカザフ人の受けた被害を知らないわけではありません。

2023年に日本で劇場公開されたモンゴル映画『セールス・ガールの考現学』(худалдагч охин 2021年)は犬以外の家畜はほとんど登場することのない現代モンゴル国の都会人の生活を描いた作品ですが、主人公の女子学生は親からの勧めで原子力工学を専攻しています。勿論、モンゴル人民共和国時代にも原子物理学系のモンゴル人研究者はそれなりの数いました。それは当然のことでしょう。20世紀、東西冷戦と中ソ対立の時代、モンゴル人民共和国には、ソ連の核ミサイルが配備されていたのです。

2013年3月の安倍首相モンゴル訪問に際して、移動してのデモを禁じられたモンゴルの反核活動家たちは、「核のサムライよ、モンゴルに手を出すな」(NUCLEAR SAMURAI'S HANDS OFF MONGOLIA)という英文の横断幕を掲げて沈黙の抗議を示しました。

2007年に、環境のノーベル賞とも言われるゴールドマン賞を受賞した牧民出身の環境活動家ツェー・ムンフバヤルによる、水資源を鉱山乱開発から護る草の根環境運動は、「河川源流、水資源保護地域、及び森林地帯における鉱物資源探査・利用の禁止に関する法律」という長い名前の法律として結実しました。彼は広大な国土を乱開発から救った国民の英雄だったのです。しかし、国連環境計画の期待とは裏腹に、2013年9月16日、この環境保護法の改悪に反対して行動を起こしたムンフバヤルらが逮捕されました。

政府よりのメディアの伝えるところでは、9月16日、ウランバートル中心部、ルイ・ヴィトンなどが入る高層ビル他数ヶ所で爆破予告通り爆発物が発見され、環境保護団体のデモに銃を携帯して参

加していた彼らが逮捕されたというのです。まもなく、モンゴルの環境 NGO のゴロムトは、故郷の自然と暮らし、民族の権利、大衆の利益と輝かしい未来のために命がけでの運動を続けるムンフバヤルら愛国者にテロリストの濡れ衣を着せようとしているとして、強く政権を非難する声明を出しました²²⁾。

翌10月、共同出資会社である三菱商事 CEO 出席の下、フランスのアレヴァ社がモンゴルのウラン鉱山開発に関する合意文書に調印したという事実、そして、その調印式1か月前に、環境活動家「水の英雄」ムンフバヤルがテロ容疑で逮捕されたという事実、どちらも、日本の大手メディアで取り上げられることはありませんでした。

『VIVANT』に登場する、日本の公安部外事課の元スパイ、ノゴーン・ベキなる人物は、奥出雲の農業経験をもとに荒地を畑にするという事業に取り組み、井戸を掘り、河川を工事し灌漑を進めたと自ら語るのですが、カザフスタンの年間降水量は日本の3分の1程度ですし、モンゴルなら、さらに、その半分くらい、年間平均気温は、ウランバートルでもマイナス0.8℃くらい、最も寒い時期の平均でマイナス20℃くらいにはなります。自然環境の全く異なる米作中心の奥出雲の農業経験がバルカで通用すると想像できる人はかなりの少数派だと思います。

もし、ベキの言葉にリアリティがあるとすれば、スパイである彼が水の在りかに関する調査を行っていたという点でしょう。どんな開発を行うにせよ、水は不可欠です。(ウランは水脈に沿って存在します。)勿論、乾燥アジアの草原地域で強引な緑化活動をすれば、さらなる砂漠化を引き起こすことは中国の事例が如実に示しています。長期的にみれば、ベキの緑化の「魔法」は消えていく運命でしょう。だからこそ、ベキは埋蔵地下資源の開発が大事だと思ったのかも知れません。

ベキの出した結論は、奇しくも、西北研究所の今西錦司著「草原の自然と生活」(1944年)の結論と同じです。

「そこでかりに地下の埋蔵資源というものを考えてみるのであります。すなわち草原や砂漠の下から、鉄や石炭がたくさん見つかったとする。するとここで蒙古の自然に対する価値標準というものが一変するのではないかというように考えられる。・・・中略・・・動物や植物の立場といったものを媒介しなくても、これははじめから人間の立場で、人間の意志と技術とで、ことをおしめてゆけるのである。・・・それは純粋な人間的標準にしたがった自然の利用である。」²³⁾

『VIVANT』では、ノゴーン・ベキや主人公である別班員、公安部外事課の人々、すべての日本人が、バルカの弱者救済のためという大義を掲げて、埋蔵地下資源の採掘権で私服を肥やす買弁的なバルカ人政治家を排除して、結局、バルカを日本に最も都合のよい原材料のサプライチェーンの中に組み込もうとしているわけです。

いまま、ウラン採掘現場近くで健康被害や家畜被害を訴える人たちの姿をメディアが世界に発信することは滅多にありませんが、それはそんな人たちが皆無であるということを意味しているわけではありません。

『VIVANT』の元公安のスパイである父親も、現職の自衛隊別班のスパイである息子もモンゴル語を

22) ムンフバヤルらの水資源に関する活動については、<https://www.transrivers.org/documents/rivers-and-mining/the-short-history-of-the-law-with-long-name/> 等を参照。

23) 今西錦司『遊牧論そのほか』(平凡社ライブラリー 1995年)46頁。

操りながら、モンゴル語を話す人たちなら誰でも知っていることを決して口にすることはしないのです。

「遊牧地を掘ってはならない、水を汚してはならない。」

これは、チンギス・ハーンの教えとして語られることが多いのですが、べつにチンギスの独創ではなく、モンゴル誕生のはるか前から、草原ベルト地帯で家畜とともに生きてきた人々に共通の叡智の中核となる掟です。

デヴィッド・グレーバーが遺作『万物の黎明』で例示したように、人類の文明は近代の考える進歩への一定方向に進化するわけではないし、人類の抱く多様な価値と暮らし方には様々なオルタナティブが存在したはずです。モンゴル人は、「遊牧地を掘ってはならない、水を汚してはならない」という掟を護り、土地を私有すること自体を頑なに禁じてきました。極めてデリケートで複雑なニッチである草原は、一度掘り返すともう二度と元には戻らないのです。

「人間が神に取って代わろうとすれば、人間自身にとっての最悪の敵となる」と教皇が語った所以です。

遊牧地、草原や森林やゴビは、柵で囲って主人面するところではありません。そんな風に考える、土地の所有の制度を持たなかったモンゴル人を手本と仰いで、土地バブルに狂った日本人へ向けて、司馬さんは書きました。

「日本国の国土は、国民が拠って立ってきた地面なのである。その地面を投機の対象として物狂いするなどは、経済であるよりも、倫理の課題であるに違いない。ただ、歯噛みするほど口惜しいのは、「日本国の地面は、精神の上において、公有という感情の上にたったものだ」という倫理書が、書物としてこの間、たれによっても書かれなかったことである。（『風塵抄2』、1996年）

しかし、司馬さんが亡くなってから数年のうちに、モンゴル国は土地法を制定しました。

現在のモンゴル国は、もはや、牧民の国ではありません。

世界銀行らとグルになり、モンゴル人に、「祖先から引き継いだ土地の採掘権を売り、大地を穴だらけにして、地下水脈を寸断し、河川を汚して、稼いだ金で豊かになれ」と言う「核のサムライ」たちの姿を司馬さんが見たらなんと言ったでしょう。

2023年10月、原発の使用済み核燃料から出る高レベル放射性廃棄物の処分地選びをめぐる、地球科学の専門家有志が「日本に適地はない」とする声明を公表しました。声明には、日本地質学会の会長経験者を含む研究者、教育関係者や地質コンサルタントが含まれています。2024年の正月の能登の震災の折、珠洲市の原発設置計画が中止されていたことに日本人は胸をなでおろしましたよね。しかし、under control のはずの汚染水は洩れつづけていますし、福島第一のデブリは全く取り出せないままです。その程度の技術レベルで、「最高水準の安全性、持続可能性、セキュリティおよび核拡散抵抗性を保持しつつ、責任を持って原子力発電所を運転すること、長期にわたって責任を持って使用済み燃料を管理すること。」が本当にできるのでしょうか？

十年前、『モンゴル研究』No.28に書いたように、モンゴルが核燃料のフロントエンドになれば、それは、間違いなく、モンゴルがバックエンドになることを意味します。

小型モジュール炉(SMR)がそんなに便利で安全なものなら、何故、ヤクート人やカザフ人やモンゴル人のところで実験するのでしょうか。核シェルターも完備されているクレムリンやホワイトハウスでまず実験すればよいではありませんか？ そうしないなら、「マルタ」を使って人体実験を行った731

部隊石井機関の倫理感とどこがどう違うと言うのでしょうか？

新渡戸稲造は「Bushido did not require us to make our conscience the slave of any lord or king. (武士道は、われわれの良心を主君の奴隷と為すべきことを要求しなかった)」と明言しています。しかし、『VIVANT』は、国家への忠節と良心への忠実という問題を、矮小化された復讐物語に閉じ込め、経済行動学者の言う「顔のある犠牲者効果」通り、とりあえず、目の前の難病の少女一人を救っただけで満足して終わります。烈士之碑に顕彰された人々が直面した隣人たる現地人の利益と自国の国益との葛藤は放り出されたままです。

そして、「あらゆる環境破壊によるもっとも重大な影響は貧困に苦しむ人々が被り、自然破壊によって取り出される資源の大部分を消費しているのが、その産出国である貧しい国の人々ではなく、経済的に豊かな国の人々なのだ」という不正義は正されていないのです。

2022年12月、共同通信は、「防衛省が人工知能(AI)技術を使い、交流サイト(SNS)で国内世論を誘導する工作の研究に着手したことが9日、複数の政府関係者への取材で分かった。」と報じています。インフルエンサーが、無意識のうちに同省に有利な情報を発信するように仕向け、防衛政策への支持を広げたり、有事で特定国への敵対心を醸成、国民の反戦・厭戦の機運を払拭したりするネット空間でのトレンドづくりが目標だということです。

当然、『VIVANT』のSNS交流サイトもこの情報戦の舞台なのです。

しかし、健全なメディアリテラシーがあれば、たとえ、モンゴル人へのエンパシーが欠けていても、「全然近い」というシンパシーがあるのなら、夕食時、虐殺のニュースをみて、「あら、可哀そう」といって食事を続けた元宗主国の人々とは異なる、「共通善と子どもたちの将来とを考慮できる」行動がとれるはずで

4 まとめにかえて

三題噺というからには、おしまいに、洒落たおちをつけなくてはならないところでしょうが、おちにかえて、三人の方の言葉を引用したいと思います。

まず、教皇フランシスコの『ラウダーテ・デウム』の中から

・・・COVID-19のパンデミックによって、人間のいのちが、ほかの生き物のいのちや自然環境とどれほど密接な関係にあるか明らかにされたことを言い添えておきます。特別なしかたによってではありましたが、世界の一部で起こることは惑星全体に反響を及ぼすということが明確になりました。ですから、飽きられるほど繰り返し申し上げている二つの確信を、今一度述べたいと思います。—— 「すべてはつながっています。」そして「誰も独りでは救われません。」²⁴⁾

「生涯の経歴」の中で触れた、日本人にとってのモンゴルの特別さがお分かりいただけたでしょうか。ここまでお話してきた通り、『VIVANT』と烈士之碑とCOP28「すべてはつながっています。」皆さんとも繋がっているのです。

わたしが見てしまったものに触れてしまった皆さんは、それを引き受けて、何かをしなくてはなら

24) 教皇フランシスコ(著)、瀬本正之(翻訳)『使徒的勧告 ラウダーテ・デウム——気候危機について』(カトリック中央協議会2023年)18頁。

なくなっただけです。

何をなすべきか、ヒントとして、先輩からお預かりしたメッセージを引用します。

・・・大阪外国語大学のモンゴル語科が世界のための学問の場であるというふうに、貴兄たちが、そのようにして行って下さい。私どものころは戦争ばかりで、じつにつまらぬ時代でした。私どものころにも優秀な人がいましたが、戦争と戦後の混乱のためにみな中道で変なぐあいになりました。その悔いを後進のひとびとの努力で癒してもらいたく、こんなお返事を書きました。

諸兄によろしく

12月 何日だったかな。夜

いまから、50年前、1974年の12月、司馬遼太郎さんから頂いた手紙の末尾です。

わたしは、司馬さんからモンゴル語科の後輩学生へと贈られた『モンゴル紀行』の読後感として、ハガキに汚い字で、「われわれにとってのモンゴルはロマンティックな存在ではあり得ない」というようなことを書いたのです。当時の司馬さんは、同時に複数の長編小説の連載を抱えていて、多忙を極めていたはずですが、生意気な後輩学生のために執筆用名前入りの原稿用紙4枚にわたる返事を下さいました。

私信ではありますが、当時の大阪外国語大学モンゴル語科の、そして、いまの大阪大学外国語学部のすべての学生に宛てたメッセージだと思っています。(諸兄とあるのは、モンゴル語科に女性の学生もいるという認識が司馬さんになかったためでしょうね。)ですから、わたしの講義を初めて聞く大阪外国語大学、大阪大学外国語学部の学生全員にこの言葉を40年余り伝え続けてきました。大学での講義を終えるいま、モンゴルへ関心を抱くすべての方々へ引き継ぎたいと思います。自分のためや、モンゴル国や日本国の国益のためではなく、世界のための、平和と共通善につながる学問の場をつくらせて下さい。

最後に引用するのは、わたしの学生時代、当時の碩学たちがまともに取り合おうともしない、モンゴル民衆思想史研究の構想を否定せず、やさしく励ましてくださった磯野富士子さんの言葉です。磯野さんが、まだ20代の頃、自分のモンゴル体験を記録した『冬のモンゴル』の中に書かれた、瑞々しく凛とした研究姿勢の表明です。

人間の小さな力をもって自然と人間性の神秘を探るには、全部の研究者が力を合わせても遠く及ばないというのに、その一人一人がお互いの小さな力を「学者の偏屈」や独占欲で切り崩し合っていたら、一体なにができるというのだろう。・・・対象を検討するのと同じ客観的な冷静さをもって、自己の心と行動を批判することに努め、自我を捨てて真理につくことを真剣に願う人たちが、共通の研究目的によって結ばれたなら、それはこの世で作り得る最も美しい人間関係の一つではないだろうか。²⁵⁾

うちつづく戦争やジェノサイドの一刻も早い終結と、かつて詩人O.ダシバルバルが歌ったようにモンゴルの大地がそのままの姿で次の世代へと引き継がれていくことを皆さんと共に祈りながら、母校での拙い講義を終えたいと思います。

25) 磯野富士子著『冬のモンゴル』(中公文庫 1986年) 233頁。初版は北隆館 1949年。

長時間のご清聴ありがとうございました。

付記：本稿は、2024年3月に行った同名の特別講義の講義録を基に、講義の参加者から頂戴した情報等を加えて、同年4月に再構成したものである。

(しばやま ゆたか)

情報化社会における少数民族伝統芸能の発展と活用

—モンゴル族の口承文芸ホーリン・ウリゲルの考察—

白 国忠

はじめに

情報化社会の進展とデジタル技術の普及は、少数民族の伝統芸能にも影響を及ぼしている。中国のモンゴル族の口承芸術である「ホーリン・ウリゲル」は、内モンゴル東部地域で発展し、モンゴルの歴史や英雄叙事詩を語り伝える重要な文化的手段として、モンゴル族のアイデンティティや社会のつながりを支えてきた。しかし、現代ではデジタルメディアの影響を受け、伝承の形が変化しつつある。

ホーリン・ウリゲルは、後継者不足や都市化、新たな娯楽の普及といった課題にも直面している。1980年代以降、主要な演者の引退や死亡により後継者の育成が難しくなっている。また、都市生活の変化や娯楽の多様化により、公演の機会や場所が減少している。このような状況下で、ホーリン・ウリゲルは伝統を守りつつ現代社会に適応する新たな方法を模索する必要がある。

本文では、ホーリン・ウリゲルが情報化社会の中でどのように変化しているかを、演奏者と視聴者への調査をもとに分析する。TikTokなどのソーシャルメディアを活用した新たな伝承方法に関するデータを収集し、演奏者と視聴者の間に生じるギャップや矛盾を明らかにする。また、ホーリン・ウリゲルが現代のモンゴル族にとって持つ社会的・文化的な意味と、デジタル技術が伝承方法に与える影響についても考察する。

本文を通じ、ホーリン・ウリゲルが情報化社会でどのように変化し、モンゴル族の文化的アイデンティティや社会の結束にどのように寄与しているかを明らかにし、デジタルメディアを活用した新たな伝承方法が少数民族の伝統文化の継続にどう影響を及ぼしているかを検討する。

I ホーリン・ウリゲルとその背景

1. ホーリン・ウリゲルとは

(1) 概要

ホーリン・ウリゲル (ulger) は、内モンゴル東部地域における伝統的な口承叙事芸能であり、モンゴル族の歴史や文化の一部を成している。この芸能は、主に四胡を伴奏に、演者ホールチ (huurchi) が低音で語り歌う形式を持つ。物語の内容には、中国の歴代王朝にまつわる伝説やモンゴルの英雄叙事詩、さらに民謡などが含まれており、多様なテーマ性が特徴的である (王, 1995; 谢, 2008)。その起源は、チンギス・カンの時代に遡ることができ、当時のモンゴル族が『ジャンガル伝』や『チンギス・カン伝』

といった英雄史詩を四胡の伴奏と共に披露していたことに由来する(秦・特,1999)。漢民族の移住と共に、漢族の文学作品が地域に広がり、『三国志』や『水滸伝』などがホーリン・ウリゲルに取り入れられたことは、文化の交差点としての内モンゴルの特性を反映している(スチンバト,2011)。

(2) 起源

ホーリン・ウリゲルの起源に関する学説にはいくつかの視点が存在する。最も古く一般的な説は、12～13世紀のチンギス・カン時代にその基盤が形成されたというもので、モンゴル族の英雄叙事詩を吟じることが主要な芸能として発展したとされている(王,1995; 谢,2008)。特に、モンゴル族と漢人の文化のおよび政治的交流が進展した16～17世紀に、ホーリン・ウリゲルは新たな形態を取り入れ、さらに洗練されたものへと進化した(閻,2004)。また、清朝時代における蒙漢文化の相互作用も、その発展に大きな影響を及ぼしている(秦・特,1999)。農耕文化と遊牧文化が交差する内モンゴル地域では、漢族からの文化的影響がモンゴルの口承文学に新たな要素をもたらし、ホーリン・ウリゲルの内容と形式を多様化させた。

(3) 集成者

漢民族との文化的な融合は、ホーリン・ウリゲルの発展において重要な役割を果たした。特に、モンゴル語と漢語の文学的な結びつきを促進したダンソニマと楊鉄龍の功績は大きい。ダンソニマ(1810～1889年)は幼少期に葛根廟で学び、モンゴル語、漢語、チベット語に精通し、『三国志』や『水滸伝』などの漢族文学をモンゴル語に翻訳した(包,2008)。これにより、ウリゲルはモンゴルの叙事詩だけでなく漢族の文学も取り入れ、多彩な芸能として発展することになった。

一方、楊鉄龍(1965年生)は遼寧省阜新モンゴル族自治州出身のウリゲルの代表的な伝承者であり、幼少期から父に四胡の演奏や説書の技術を学び、1982年より活動を開始する。1987年には地元で20万字以上の民間歌詞や祝詞を収集し、1996年にホルチン説書「一級」資格を取得する。楊の代表作『唐書五伝』は唐王朝の忠臣と奸臣の対立を描いた作品で、民族文化や神話の要素を取り入れ、その芸術性において高い評価を受けている(蒙古貞夫,2021)。楊は全中国大会でも数々の賞を受賞し、地方や国家レベルでウリゲルの伝承とモンゴル文化の発展に貢献している。

2. 発展した背景

ホーリン・ウリゲルの発展は、清朝時代の高圧政策と羈縻政策(きびせいさく)¹⁾をはじめ、モンゴル族の英雄叙事詩、ラマ教、シャーマン教といった多様な文化的要素が複雑に絡み合いながら形成された。清朝初期には、羈縻政策が中心となり、モンゴル族、特にホルチン部との政治的同盟や婚姻関係を通じて地域の安定と文化交流を推進した。これにより、漢文化や技術がモンゴル地域に伝播し、地域発展が促進される一方で、モンゴル独自の文化的アイデンティティも保たれた。

しかし、外部の脅威や反乱への対応が求められた康熙以降、羈縻政策に高圧政策が補完的に用いられるようになり、蒙漢文化交流を制約する一面も現れた。このような背景の中で、英雄叙事詩はウリゲルの基盤を形成し、即興的な語りの形式が文化的アイデンティティの維持に寄与した。

また、ラマ教寺院は学問と芸術の中心地としてウリゲルの発展を支え、シャーマン教の音楽はその

1) 清朝の「羈縻政策」は、非漢民族地域を間接的に支配するために採用された政策で、地元の伝統的首長を利用し、中央政府の影響を保ちながら現地の自立性を一定程度認めたものである。これにより、清朝は多様な民族を含む広大な領土を効果的に統治した。

表現に多様性と即興性を加えた。20世紀にはウリゲルインゲル²⁾の設立により伝承の制度化が進み、文化大革命期の停滞を経て復興したが、現在ではデジタルメディアを活用した継承の課題が浮上している。このように、清朝の政策と文化的要素が複雑に交錯しながら、ホーリン・ウリゲルはモンゴル文化を象徴する重要な芸術形式として発展してきた。

(1) 清朝の高圧政策とモンゴル族

清朝時代におけるモンゴル族、特にホルチン地域³⁾の役割は、政治的および文化的観点から重要であった。清朝政府は北方遊牧民族を潜在的脅威と見なし、伝統的な手法に基づく高圧政策を展開した。これらの政策は蒙漢文化交流に制約を与えた一方で、モンゴル文化の一部、特にウリゲルの発展に間接的な影響を及ぼした。

モンゴル族がその広範な地域分布と文化的多様性により、清朝時代の中国社会において重要な役割を果たした。ホルチン地域はその文化的・地理的特徴から、清朝政府との関係において中心的な位置を占めた。清朝政府の政策がモンゴル文化や芸能の発展、とりわけウリゲルに与えた影響が顕著であった。また、これらの政策は蒙漢文化交流を抑制し、異文化間の相互理解を制限する一方で、地域ごとの文化的ニーズに応じた新たな文化的表現形式の発展を促進する契機ともなった。ウリゲルはその厳しい環境の中で独自の発展を遂げ、モンゴル文化の多様性と豊かさを示す重要な要素となった。(張, 2003; 曹, 2005)。

清朝時代のホルチン地域における文化的発展は、政治的措置が文化形成に及ぼす影響の複雑性を示している。こういう制約の下で、ウリゲルのような芸術形式が発展したことは、文化と政治の相互作用が文化的発展においていかに重要な役割を果たすかを示唆している。

(2) 羈縻政策とホルチン地域

清朝の「羈縻政策」は、モンゴル族、特にホルチン部との関係構築に重要な役割を果たした。この政策によると、モンゴル族と清朝の間に強固な同盟関係が築かれ、文化的交流と地域の発展が促進された。

清朝の統治者は、ホルチン部が清朝の覇業において重要な役割を果たすことを早期に認識し、彼らを同盟者として引き込むための戦略を実施した。これは、「北親不断」⁴⁾の政策の一環として行われた。清朝の皇帝たちは、モンゴル族のホルチン部との結びつきを重視し、婚姻関係による同盟関係を築いた。これには、モンゴル王公の娘を后妃として迎えることや、清室王公家の姫をモンゴル王公の子弟と結婚させるなどの措置が含まれていた。清朝の王女がモンゴル地区に嫁ぐ際、彼女たちの一行には召使い、侍従、職人、芸能人などが同行した。こうした過程で、漢文化や技術がホルチン地区に伝播し、文化的な融合と地域の発展が促進された(閻, 2004)。

清朝の「羈縻政策」とホルチン部との関係は、政治的同盟を超えて文化交流にも寄与し、地域の多

2) ウリゲルインゲル(Ulger Inger)は、ウリゲルを保存・普及するための施設や組織を指す。

3) ホルチン地域は清朝の中頃から急速な開墾農地化の波にさらされてきたとしている。漢族の移住とともに遊牧民族であるモンゴル族の生業は遊牧から半農半牧へ変化し、集住する村落を形成した。ホルチン地域とは現在の通遼市、赤峰市、ヒンガン盟などの約21万平方キロメートルの地域を指し、約294万人のモンゴル族が暮らしていて、内モンゴルのモンゴル族人口の7割を占めている。

4) 清朝の「北親不断」政策は、ロシアとの友好を維持し北方の安全を確保するための外交方針で、国境の定義と通商を促進する条約に基づいている。清朝とロシアはネルチンスク条約(1689年)やキャプタ条約(1727年)を締結し、両国間の国境を定めるとともに通商や使節交流を規定した。この政策により、清朝はロシアとの緊張を抑え、安定した国際関係を維持した。

様性と発展に重要な影響を与えた。この歴史的プロセスは、異なる文化間の交流が地域全体に文化的豊かさをもたらす一例として捉えられる。

(3) モンゴル族英雄叙事詩とその影響

ホーリン・ウリゲルの発展には、モンゴル族の英雄叙事詩が大きな影響を与えている。特に、モンゴル族の口承文学としての英雄叙事詩は、ホーリン・ウリゲルの主要な土台を形成し、文化的アイデンティティの維持に寄与している(烏,1990)。これらの叙事詩は、民間伝承の一環として、決められた脚本を持たずに演者の即興的な語りで語り継がれており、その独自の形式がウリゲルの発展に大きく寄与した(薩仁,2001)。

(4) ラマ教の影響とモンゴル文化発展

ラマ教の影響もホーリン・ウリゲルの発展に欠かせない要素である。清朝時代、ラマ教寺院は知識と芸術の中心地として機能し、多くのモンゴル族の知識人や芸術家がこの地で学んだ。寺院は経典や文献を所蔵し、学問と芸術の場を提供することで、ホーリン・ウリゲルの芸術的発展にも大きな役割を果たした(佟,2008; 吳,2008)。

(5) シャーマン文化の影響

シャーマン教もまた、ホーリン・ウリゲルに影響を与えた重要な文化的要素である。シャーマン教の音楽は、100以上の曲調と宗教的な要素を持ち、ホーリン・ウリゲルにおける音楽的表現の多様性と即興性を強化した(島村,2011; ナランピリゲ,2009)。この影響により、ウリゲルは単なる語り芸術にとどまらず、豊かな音楽性を持つ表現形式へと進化し、モンゴル文化のアイデンティティの一端を担うようになった。

(6) ウリゲルインゲルの成立と現代的課題

ウリゲルインゲルは、ウリゲルの伝承や普及を目的とした施設であり、初めての設立は1928年のウランホトに遡る(蒙古貞夫,2021)。文化大革命の影響で一時的にその機能が停止したが、後に復興し、現在もモンゴル文化の象徴的な存在として重要な役割を果たしている。現代においては、デジタルメディアの活用など新たな戦略が必要とされており、ホーリン・ウリゲルの継承と適応が課題となっている。

II ニューホールチに関する調査

1. 調査の概要

ホーリン・ウリゲルが現代社会でどのように適応し、変化しているのかを明らかにするためには、その伝承方法や担い手に関する具体的な事例を調査することが不可欠である。特に、伝統的な方法で活動するホールチと、デジタルメディアを活用して伝承を行うニューホールチ(新世代の伝承者)の双方を比較することで、技術革新が伝統芸能に与える影響を考察する必要がある。

この目的のもと、第一回の調査では、ホーリン・ウリゲルが現代社会でどのように変化しているかを明らかにするため、ニューホールチに対するインタビューを実施した。調査では、特に現代技術が伝承方法や活動にどのような影響を与えているのかを分析した。

2. ニューホールチについての調査

2023年12月5日から2024年3月15日にかけて、SNSを活用する5人のニューホールチに対してオンラインで半構造化インタビューを実施した。この調査により、現代社会におけるホーリン・ウリゲルの伝承方法や、デジタル技術の役割が明らかとなった。代表的なインタビュー対象者である3名は、いずれもインタビュー対象者である3名は、いずれも中国の三大ショットビデオアプリを活用し、ホーリン・ウリゲルを新たな形で普及させる点で共通していた。

(1) TikTok (中国本土版) のウリゲルインフルエンサー

ホールチ A は、TikTok を主なプラットフォームとして活用し、約4.2万人のフォロワーを持つインフルエンサーとして活動している。彼は、ホーリン・ウリゲルに現代的なテーマを取り入れ、視聴者の関心を引くコンテンツを作成している。特にフォロワーの65%が25歳以下の若者で、演奏前に物語の要約や教訓を簡潔に説明し、視聴者が理解しやすい工夫をしている。また、TikTok のライブ配信を通じてモンゴル族に関連する商品や記念品を販売しており、毎月の売上は約10,000元に達している。しかし、視聴者の約40%がコンテンツの理解が難しいと感じており、今後は字幕や多言語対応が課題となっている。

ホールチ A の自作のホーリン・ウリゲルには、最近のニュースや政治的な出来事を引用し、それに対する評価も含まれている。しかし、字幕の欠如などから彼の活動はまだ十分な効果を上げていないと指摘された。この現状は、伝統芸能のデジタル化における課題を浮き彫りにしており、視覚的な補助や多言語対応が必要とされていることを示している。

ホールチ A の取り組みは、伝統文化と現代メディアの融合の好例である。彼は若い世代がアクセスしやすく、理解しやすい形でホーリン・ウリゲルを再解釈し、普及に努めている。これは、伝統文化を現代社会に適応させる革新的な方法を示しており、TikTok を通じたホーリン・ウリゲルの伝承は、若い世代への文化的影響力を拡大する可能性がある。伝統と現代の融合を通じ、ホーリン・ウリゲルの伝統的要素を維持しつつ、現代的な解釈を加えることで、より広い聴衆に訴えることができるようになっていく。

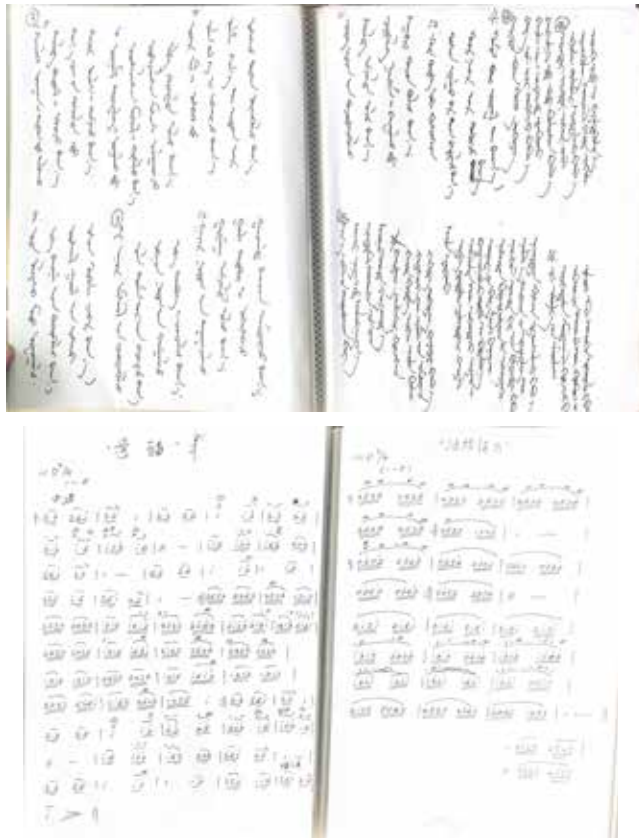
(2) 快手⁵⁾ のホーリン・ウリゲル先生

ホルチン芸術職業学院でウリゲルを教えるホールチ B は、快手を活用してホーリン・ウリゲルの教育普及に努めている。彼は500時間にわたる『紅樓夢』をテーマにした録音作品を制作し、モンゴル文化と中国文化の融合を象徴するコンテンツとして発信している。彼の作品は再生回数が15万回を超え、快手におけるモンゴル文化関連コンテンツとしてトップクラスの人気を誇る。

ホールチ B の教育プログラムには30人の学生が参加しており、快手での教育動画は毎回500回以上再生されている。デジタルプラットフォームを教育ツールとして活用することで、若い世代への伝承が着実に進んでいる。彼の教育プログラムは、伝統的なホールチ技法に加えて音楽知識や技術を取り入れたカリキュラムに基づいており、伝統と現代の思想を織り交ぜた教材の編集にも携わっている。こうして彼は、文化的アイデンティティを維持しつつ、伝統芸術を現代的に解釈するバランスを保ちながら教育を行っている。授業は週に2~3回、長時間にわたり行われ、現在7人の学生が登録している。入学には中学または高校卒業程度の学歴とモンゴル語の基礎知識が必要である。

5) 快手は、中国を拠点とする短編動画共有プラットフォームであり、特に地方部の利用者に支持されている。

写真1 ホールチ B が編集したテキスト(上)と楽譜(下)



ホールチ B の教育は、モンゴル族と漢民族の歴史、文芸手法、詩の作成、四胡の演奏など、多岐にわたる専門技術を学生に教えることで、ホーリン・ウリゲルの伝統を守りつつ、現代文化との融合を目指している。また、ヒンガン盟の布仁巴雅爾派の喉歌など、さまざまなホーリン・ウリゲル流派の特徴を取り入れ、より広い視野でホーリン・ウリゲルの可能性を追求している。各流派はそれぞれ独自の音楽的特徴や文化的背景を持っており、彼はそれらを教育に取り入れることで、ホーリン・ウリゲルの枠を超えた創造的な発展を促進している。

このように、ホールチ B は厳格なプログラムを通じてホーリン・ウリゲルの継承者を育成し、学生たちに文化的アイデンティティと技術的スキルの両方を伝えている。また、彼はホーリン・ウリゲルの現代化と国際化を視野に入れた教育を推進している。

(3) WeChat のプロデューサー

ホールチ C は、伝統的なホーリン・ウリゲルの演奏技法と現代のビジュアルアートやマルチメディア技術を組み合わせ、新たな視聴者層にホーリン・ウリゲルを紹介している若手演奏者である。彼は特に WeChat のショートビデオプラットフォームを活用し、伝統的な内容に現代的な要素を融合させることで、若年層にホーリン・ウリゲルの魅力を伝えることを試みている。他のアカウントが直面する厳しい言語審査に対して、比較的自由的な表現が許されている点で特徴的である。

また、彼は伝統芸能にとどまらず、現代のニュースや震災や水災で活躍した英雄などの社会的なテーマを取り入れ、文化の持続可能性を追求している。このアプローチにより、彼の演奏は新たな視点を得て、現代の観客にも共感を呼んでいる。たとえば、彼の WeChat ビデオは2023年に再生回数が累計で50万回を超え、特に18歳から30歳の若年層に人気があることが判明している。

3. ニューホールチについての分析と結論

(1) 分析

ニューホールチ三人の活動を総括すると、彼らはいずれもデジタルメディアを用いてホーリン・ウリゲルを新たな形で普及させ、現代社会に適応させる試みをしている。ホールチ A は、TikTok を通じて伝統文化に現代的なテーマを織り交ぜつつ、商品販売などの商業的要素を加えたコンテンツを制作しており、伝統と商業活動の融合を推進している。一方、彼のコンテンツが一部の視聴者にとって理解が難しいという課題は、伝統文化の本質を保持しながら、デジタル技術を効果的に活用するバランスの難しさを示している。

ホールチ B の活動は、快手を利用した教育を軸に展開しており、ホーリン・ウリゲルの伝統技法を体系的に若者へ継承している点で、教育を通じた持続的な伝承の重要性が浮かび上がる。彼の録音作品やカリキュラムは、モンゴル文化と中国文化の融合を象徴しており、単なる技術的な伝承に留まらず、文化的な意味や価値を次世代に伝える役割を果たしている。ただし、デジタルプラットフォームを活用しているものの、その範囲が教育という枠組みに限定されているため、より広範な視聴者へのアクセスや影響力という面での限界も存在している。

ホールチ C は、WeChat を通じて社会的な問題をホーリン・ウリゲルに取り入れるという新しい手法を取っており、特に若年層に向けて伝統文化を現代の文脈で再解釈している。彼の活動は、伝統文化が現代社会の中で再定義され、どのように新しい意味を持つのかを探求するものである。特に、自由度の高い表現が可能な WeChat を選んだことで、他のプラットフォームでは実現しにくい社会的メッセージを伝統芸能に織り込むことが可能になっている。しかし、社会問題と伝統文化の結びつきが強調される一方で、伝統的な価値観や文化的背景が相対化されるリスクも存在している。

(2) 結論

ニューホールチ3人の活動から、デジタルメディアを活用した伝統文化の現代化と継承には新たな可能性と課題があることが明らかになった。彼らはそれぞれ異なる方法でホーリン・ウリゲルを広め、若い世代やデジタル世代に伝統文化への関心を引きつけている。しかし、伝統の本質や価値をどの程度保ちながら、現代の技術や社会に適応させるかという問題も浮上している。デジタルメディアは視聴者との距離を縮める一方で、伝統の意義が薄れたり、消費されるだけのものになってしまうリスクもある。

特にホールチ A の活動は、商業活動と伝統文化の融合によって新たな収益の可能性を生む一方で、伝統の精神性や背景が軽視される危険も伴う。また、ホールチ B の教育的アプローチは、伝統技術の保存と伝承において重要だが、現代技術を使った拡大の余地がある。一方、ホールチ C が社会問題を取り入れた試みは、伝統芸能に新しい意味を与えるものであり、伝統と現代の融合の可能性を示しているが、伝統の根本的な価値をどこまで保てるかについては慎重な検討が必要だ。

今後は、伝統文化の大切な部分を守りつつ、デジタル技術を活用して現代社会に適応させることが

大きな課題となる。ニューホールチの活動は、伝統文化が単に過去の遺産として保存されるのではなく、現代の技術や社会で再解釈され、生きた文化として次世代に引き継がれるための新しいモデルを示している。このプロセスの中で、文化的なアイデンティティや社会的な役割がどのように変わり、どのように伝承されるのかを探ることが、伝統文化の持続的な発展に向けた鍵となるだろう。

III 伝統的なホールチに関する調査

1. 調査の概要

第二回の調査では、52歳のホールチDと53歳のホールチEの2名の伝統的なホールチにインタビューを行い、現代社会におけるホーリン・ウリゲルの演奏や継承についての見解を探った。彼らは長年ホーリン・ウリゲルを演奏してきたが、これを本業とはせず、結婚式や祭りなどの機会に余暇を利用して伝統的な形で演奏している。彼らはスマートフォンやニューメディアを使わず、従来の方法を守りながら活動を続けている。

彼らの見解は、現代化が進む中で、ホーリン・ウリゲルの持続可能性や、伝統をどのように守り伝えていくかという点で重要な洞察を提供している。以下は、彼らとのインタビューから得られた内容をまとめたものである。

2. 伝統的なホールチについての調査

(1) ホールチDの見解

ホールチDは、幼少期からラマ教を信仰する父親の影響で、ホーリン・ウリゲルに親しんできた。彼は仏教文献やモンゴル族の英雄叙事詩、さらには『隋唐演義』といった漢族の歴史物語にも触れており、これらを基盤に伝統的なホーリン・ウリゲルを演奏している。しかし、ホールチDはモンゴル語教育の衰退に深い懸念を示しており、経済発展や社会の効率化の中でモンゴル語教育が減少し、漢語中心の教育が普及している現状が、伝統文化の継承において大きな障壁となっていると指摘する。特に、若者がモンゴル語を話せない現状が、ホーリン・ウリゲルの正確な伝承を難しくしていると述べている。

(2) ホールチEの見解

ホールチEは、幼少期から足に障害を抱えていたため、肉体労働が困難であったことから、村の師匠からホーリン・ウリゲルを学び、生計を立ててきた。彼の見解によれば、交通の発展がホールチの移動を容易にし、文化活動の普及に寄与している一方で、長編の英雄叙事詩をモンゴル語で語るホールチが減少している現状を憂いている。ホールチEは、伝統的なホールチが現代社会においてその演奏形態や役割を変化させていることを指摘しており、かつての吟遊詩人のように広範囲を巡る活動が減少し、地域密着型の文化活動へとシフトしていると述べている。

3. 伝統的なホールチについての分析と結論

(1) ホールチDの分析

ホールチDは、モンゴル語の衰退がホーリン・ウリゲルの継承に深刻な影響を与えていると指摘している。モンゴル語はホーリン・ウリゲルを伝えるうえで重要であり、その言葉を通じて伝わる文化

的な価値や物語が正確に次世代に伝わることが必要だと考えている。ホールチ D は、モンゴル語教育の減少と、若者がモンゴル語を話せなくなっている現状を強く懸念している。この状況は、文化的アイデンティティの弱体化につながる可能性があるため、言語と文化のつながりを考えるうえで重要な示唆を与えている。

ホールチ D の経験からは、モンゴル語教育の強化がホーリン・ウリゲルをはじめとする伝統文化の継承に不可欠であることがわかる。また、教育政策において、言語と文化の保護がどのように位置づけられるかが、伝統芸能の未来に大きく関わることが示されている。さらに、現代の経済発展と効率化が伝統文化の保護に影響を及ぼしている現状も指摘され、文化の保存と現代社会のバランスが課題となっている。

(2) ホールチ E の分析

ホールチ E は、現代社会の技術的・社会的変化がホールチの活動に与える影響に注目している。交通の発展がホールチの移動を容易にし、文化活動の広がり貢献している一方で、モンゴル語による長編の英雄叙事詩を語るホールチが減少していることを懸念している。これは、ホーリン・ウリゲルの内容が短縮され、伝統的な長編の物語が失われつつあることを示しており、伝統の簡略化が進んでいる可能性がある。

ホールチ E の指摘からは、伝統文化が現代社会に適応する中で変わりつつある一方で、伝統的な形を維持するのが難しくなっている現実が浮き彫りになる。文化活動が広く普及するという前向きな側面もあるが、伝統的な物語や演奏形式が失われるリスクも存在する。文化の多様化と伝統の持続を両立させる方法が、今後のホールチ活動における重要な課題となっている。

(3) 結論

ホールチ D とホールチ E の意見を総合すると、ホールチが直面している主な課題はモンゴル語教育の衰退と伝統文化の簡略化である。ホールチ D は、モンゴル語が文化的アイデンティティの維持に不可欠であり、言語教育の強化がホーリン・ウリゲルの継承につながると考えている。一方、ホールチ E は、交通や技術の進歩が文化活動の広がり寄与するものの、長編叙事詩の演奏が減少していることを懸念している。

これらの分析から、ホーリン・ウリゲルの未来にとって大切なのは、伝統の重要な要素を守りながら、現代社会に適応する方法を見つけることだといえる。モンゴル語教育を充実させ、文化の根本を保ちながらも、デジタル技術や交通の発展を活用して、新しい伝承方法を模索することが必要である。文化の多様性を促進しつつ、伝統の本質を失わないようにすることが、ホールチ活動の継続にとって重要となる。

4. ニューホールチと伝統的ホールチの比較

ニューホールチと伝統的ホールチはいずれもホーリン・ウリゲルの継承において重要な役割を担っているが、その方法は大きく異なる。ニューホールチはデジタル技術を積極的に使い、幅広い視聴者に伝統文化を紹介している。特に SNS や動画プラットフォームを活用することで、若年層に対して伝統を広めやすい点が強みである。しかし、技術に依存することで伝統の深い価値が失われるリスクもある。

一方、伝統的ホールチは、文化の本質や言語の維持を重視し、直接的な口承で伝承することにこだ

わっているが、デジタル化に対応していないため、若い世代へのアプローチが難しい状況にある。このため、現代社会での普及力に限界があり、伝統文化の持続可能性については課題が残っている。

今後の課題は、ニューホールチと伝統的ホールチの取り組みをどのように共存させ、互いに補完し合うかである。ニューホールチはデジタル技術を活用しながらも、伝統の大切な価値を守る工夫が必要であり、伝統的ホールチは若い世代との接点を増やし、現代社会に適応した新しい伝承の形を模索する必要がある。

さらに、両者が協力することで、デジタルメディアを使いつつも伝統の本質を損なわない伝承が可能になるだろう。ニューホールチの広い視聴者層と、伝統的ホールチの深い文化的知識や技法を結びつけることで、ホーリン・ウリゲルはより持続的で多様な発展を遂げる可能性がある。今後はデジタル技術と伝統の融合を探り、両者が互いに補完し合いながら、ホーリン・ウリゲルの継承と発展を進めることが求められる。

IV 視聴者に関する調査

1. 調査の概要

2023年12月15日から24日にかけて、WeChatのグループ⁶⁾機能を活用し、中国内モンゴル自治区通遼市および遼寧省阜新モンゴル族自治州に住むモンゴル族の視聴者10名を対象にオンラインインタビューを実施した。調査では、年齢、性別、学歴、職業、居住地、ホーリン・ウリゲルの視聴歴といった基本情報に加え、ホーリン・ウリゲルの意義や将来への期待についても質問し、回答を整理した。インフォーマントは任意抽出で選び、インタビューは漢語で行ったため、日本語表記は筆者が適切と判断した表現を用いている。

ただし、今回の調査は対象者が10名に限られており、得られた結果は地域全体や多様な層を十分に代表するものとは言えない。また、若年層や都市部の視聴者に関するデータが不足している点も課題である。今後は、これらの層を含むさらなる調査を行い、多様な視点を取り入れる必要がある。本調査はホーリン・ウリゲルの継承と発展について、視聴者側からの意見を初期的な知見として位置づけるものである。

6) WeChat(微信)は中国で最も広く使われているソーシャルメディアアプリで、普及率が非常に高い。2023年6月時点で、WeChatの月間アクティブユーザー数は13.27億人に達していて、中国のモバイルインターネットユーザー数(12.32億人)を上回っている。

表1 視聴者に対するインタビューの整理

番号	年齢	性別	学歴	職業	視聴経歴	ウリゲルの意義	アドバイス	民族構成と言語状況	次世代の言語教育
1	45	男性	中学校	商人	30年間ウリゲルを見てきた。子供の頃から家族と一緒に見て、商売の合間にも楽しんでいる。	文化と伝統の象徴。商売をする上での精神的な支え。	デジタルメディアを活用して広い視聴者に届けるべき。現代的なテーマを取り入れることが重要。	純モンゴル族家庭。モンゴル語。	子どもは漢語教育を受けている。
2	38	女性	小学校	農民	22年間、農作業の合間にウリゲルを見て息抜きをしている。特に収穫後の冬の夜長には重宝している。	家族を一つにする絆。自然との調和や生活の知恵が詰まっている。	伝統的なウリゲルを守りつつ、農村地域の学校やコミュニティでのウリゲルの場所を増やすべき。	純モンゴル族家庭。モンゴル語。	モンゴル語教育を継続。
3	65	男性	小学校	農民	43年間、生活の一部としてウリゲルを見てきた。農閑期は特に時間を取って楽しんでいる。	過去への懐かしさと、先祖からの教えを感じさせるもの。歴史と伝統の継承。	年配の視聴者も取り込むために、伝統的な表現方法を保ちつつ、内容の多様化を図るべき。	純モンゴル族家庭。モンゴル語。	子どもは漢語教育を受けている。
4	75	女性	中学校	定年	58年間、ウリゲルは私の生活に彩りを加えてくれました。若い頃からの情熱が今も続いている。	人生の智慧と教訓が込められている。定年後の時間を豊かにしてくれる文化的な娯楽。	ウリゲルの物語を書籍やオーディオブックで保存し、アクセスしやすくするべき。	純モンゴル族家庭。モンゴル語。	モンゴル語教育を継続。
5	54	男性	大学	公務員	28年間、公私ともにウリゲルの価値を認め、推奨してきた。多くの公式な場でも取り上げられている。	社会的な教育ツールとして優れている。伝統を守りつつ、現代にも適用可能な普遍的価値を伝える。	国際的な文化交流を通じてウリゲルを紹介し、他文化とのコラボレーションを図るべき。	純モンゴル族家庭。モンゴル語。	子どもは漢語教育を受けている。
6	53	男性	中学校	農民	32年間、農業の合間に心の安らぎを求めてウリゲルを見てきた。	自然との調和と共生の教えが含まれており、農民にとってはガイダンスのようなもの。	地域ごとのウリゲルのイベントを開催し、地域コミュニティ内での意識と関心を高めることが重要。	純モンゴル族家庭。モンゴル語。	モンゴル語教育を継続。
7	48	男性	中学校	商人	17年間、ビジネスのアイデアやインスピレーションをウリゲルから得ている。	文化的アイデンティティを確立する手段。商売の成功にも精神的な豊かさにも貢献している。	若い起業家やホールチと連携し、ウリゲルに新しいビジネスや芸術の形を取り入れるべき。	蒙漢民族家庭。モンゴル語と漢言語。	子どもは漢語教育を受けている。
8	44	女性	大学	医師	29年間、医学の勉強や仕事の合間にウリゲルを通して心を癒している。	人間としての感情や思いやり、慈悲の重要性を教えてくれるメディア。	健康や福祉のテーマを取り入れたウリゲルを作成し、視聴者に有益な情報を提供することも考えられる。	蒙漢民族家庭。モンゴル語と漢言語。	子どもは漢語教育を受けている。
9	51	男性	小学校	料理人	31年間、料理のインスピレーションをウリゲルから得ている。特に伝統料理に関するエピソードが好き。	文化的な食文化を保存し、次世代へと伝える役割を果たしている。共感と教育を兼ね備えている。	料理とウリゲルを組み合わせ合わせたイベントを開催し、食文化を通じてウリゲルの魅力を伝えることができる。	蒙漢民族家庭。モンゴル語と漢言語。	子どもは漢語教育を受けている。
10	62	男性	中学校	警察官	47年間、法の執行者としての厳しい日々の中で、ウリゲルは心のオアシスとなっている。	秩序と倫理を重んじる教訓が多く含まれている。社会の安定と正義の重要性を象徴している。	社会的な課題を取り上げることで、ウリゲルを通じた教育的な役割を強化し、広い視聴者層にアプローチすべき。	蒙漢民族家庭。モンゴル語と漢言語。	子どもは漢語教育を受けている。

2. 調査からの分析

(1) 家庭の民族構成と言語使用

調査対象者10名の家庭構成を確認すると、ほとんどが純モンゴル族家庭であり、日常的にモンゴル語が使用されている。一部の家庭ではモンゴル族と漢民族の混合で、モンゴル語と漢語が併用されている。この状況は、多民族が共存する環境で日常生活における言語の多様性を反映し、モンゴル族のアイデンティティの一部として言語が大切にされていることを示している。

(2) 次世代の教育

次世代の教育については、調査対象者の半数以上が子どもに漢語での教育を受けさせている。これは、経済的な理由や漢語の社会的有用性を背景としており、将来の進学や就職を考慮した選択であると推測される。一方、モンゴル語教育を継続している家庭もあり、モンゴル語の文化的価値やアイデンティティの保持を重視する姿勢が見られる。このように、次世代の教育における言語選択には、現代社会への適応と伝統の継承が混在している。

(3) 視聴者の年齢とホーリン・ウリゲルに対する意識

ホーリン・ウリゲルが中高年層にとって生活の一部であり、懐かしさや家族とのつながりを感じさせる重要な存在であると考えられる。また、高齢視聴者にとってホーリン・ウリゲルは、過去の思い出や先祖からの教を思い起こさせるものであり、懐古的な要素が強く支持されていることがうかがえる。

(4) ホーリン・ウリゲルの意義と視聴者のニーズ

視聴者にとって、ホーリン・ウリゲルは文化的アイデンティティの確認、精神的支え、教育的な役割など多面的な意義を持つ。特に、農業や商業に従事する視聴者には、日々の生活に役立つ知恵や自然との調和が重視されている。また、公務員や医師などの高学歴層にとっては、モンゴル文化の倫理観や思いやりを学ぶ機会として受け入れられ、教育的価値が高く評価されている。

(5) 次世代へのアプローチと課題

デジタルメディアの利用が進む中、ホーリン・ウリゲルも SNS や動画配信を通じて若年層に届けられる機会が増えているが、伝統的な形式での演奏を重視する視聴者も多い。デジタル化に伴い、伝統の軽視や簡略化への懸念も存在する。視聴者の多様なニーズに応えるためには、現代的なテーマの導入や多様な表現方法を模索しつつ、伝統の本質を損なわない工夫が求められる。

V 調査結果

1. 伝承方法の変化

ニューホールチは TikTok や WeChat などのソーシャルメディアを積極的に活用し、ホーリン・ウリゲルの発信方法に変化をもたらしている。視覚的な要素や現代的なテーマの導入により、特に若年層の関心を引き、従来の伝統を新たな形で再解釈している。一方、伝統的なホールチは、地域イベントや家庭内での口承を通じて伝承を行い、ホーリン・ウリゲルの原初的な形態を維持している。この対照的な手法は、伝承文化の適応と保存という二面性を象徴している。

2. 情報化社会の影響

情報化社会の進展により、ホーリン・ウリゲルは地域を超えて広範な視聴者に届けられるようになった。デジタルメディアの普及は、伝統文化の知名度向上に貢献する一方、伝承の形式や内容に新たな課題を生んでいる。例えば、デジタルプラットフォームでの短縮された演奏形式は、視聴者の利便性を高めるが、伝統的な長編叙事詩の完全性を損なう可能性がある。また、SNSを通じて伝承される内容が視覚やエンターテインメントに偏ることで、文化的・精神的な側面が軽視されるリスクも指摘されている。

3. ホーリン・ウリゲルの文化的意義

ホーリン・ウリゲルは、モンゴル族の文化的アイデンティティの象徴であり、個人や地域社会にとって重要な精神的支柱である。ニューホールチによる新たな試みは、若年層へのアプローチを可能にし、持続可能な形での伝承を実現している。一方で、伝統的なホールチは、ホーリン・ウリゲルの本質的価値を守る役割を担い、地域社会の文化的つながりを維持する要となっている。これら双方のアプローチが補完的に機能することで、伝統の維持と革新のバランスを図りながら、ホーリン・ウリゲルの文化的意義を継続的に発展させる可能性が見いだされる。

VI 伝統芸能の進化と情報化社会への適応

21世紀の中国では、グローバル化と経済発展により、内モンゴル東部地域の伝統文化、特に少数民族文化に大きな変化が生じている。王(2021)や王・黄(2021)によると、情報メディアの発展に伴い、伝統芸能への関心が減少しつつある。さらに、劉(2023)は、専門家の減少やニューメディア技術への不慣れが、少数民族文化の適応力を低下させていると指摘している。これにより、伝統文化の継承と保存はますます難しくなり、次世代への効果的な伝播方法の開発が重要な課題となっている。

1. モンゴル族のライフスタイルの変化

中国の経済発展と都市化により、内モンゴル東部のモンゴル族の生活様式が大きく変化している。都市化によって職業の多様化や生活水準の向上が進む一方で、ホーリン・ウリゲルのような伝統文化の継承が困難になっている。コミュニティの結びつきが弱まることで、ホーリン・ウリゲルの伝承者と視聴者の接触機会が減少しているが、一方でインターネットやソーシャルメディアを活用した新たな伝承の可能性も広がっている。国家政策の変化も、ホーリン・ウリゲルの伝承に影響を与えている。牧畜地域では、新しいガバナンスシステムの導入により、伝統文化の実践が制約を受けることがある。こうした変化に適応するためには、持続可能な伝承方法の模索が必要である。

2. ニューメディアとの融合

2023年のデータによると、中国国内のショートビデオユーザーは10.44億人に達しており、インターネット利用者全体の96.8%を占めている⁷⁾。このような新しいメディアの普及は、少数民族地域や農

7) 中央网信办 第52次《中国互联网络发展状况统计报告》(全文) http://www.cac.gov.cn/2023-08/29/c_1694965940144802.htm

村部にも大きな影響を与えており、特にモンゴル族を含む農村部の住民が、自らの文化や生活様式を広く発信するためのプラットフォームとなっている。

ホーリン・ウリゲルにおいても、ショートビデオやソーシャルメディアを通じた発信が活発になり、都市部の視聴者に対して田園風景やモンゴル族の生活文化を表現することで、郷愁や感情的なつながりを喚起している。孫(2022)は、伝統音楽とポピュラー音楽が融合し、ニューメディアを通じて「ウランバトルの夜」や「天路」といった楽曲が広く認知され、大衆化していることを指摘している。これにより、ホーリン・ウリゲルもまた、現代的なメディアフォーマットに適応し、伝統と現代の結びつきを強化することが求められている。

このような状況下、ホーリン・ウリゲルは、伝統芸能としてのアイデンティティを保ちながらも、ニューメディアを活用して進化を遂げる必要がある。伝統文化が現代社会で持続的な発展を遂げるためには、新しい表現手法や視聴者との接点を模索し、革新的なアプローチを採用することが不可欠である。

3. 自己革新と適応

ホーリン・ウリゲルは、現代の社会文化的変化に対応するため、自己革新を進めている。過去には、清朝期に漢民族との文化的交流が行われたように、現在の情報化社会においても、ホーリン・ウリゲルは伝統的要素を保持しながら、現代の視聴者に向けた新しい演出手法や表現を取り入れている。これにより、伝統芸能が変わりゆく時代に適応し、観客の多様なニーズに応える作品が生まれている。

また、ホルチン地区では、伝統的な単独演奏から複数の演者が協力する形式への変化が見られ、これにより音楽の表現力やパフォーマンスの幅が広がっている。視覚的な演出やダンサーとのコラボレーションも含めた複雑なステージ演技が、観客に新たな感動を与えている。

伝承者の育成についても課題が指摘されている。現在、年配の伝承者に依存している状況が続いており、文化の持続可能な継承にはリスクがある。伝統的なホーリン・ウリゲルを次世代に継承するためには、若い伝承者の育成が急務であり、地域の多様な流派を守り、発展させることが求められている。

4. 内モンゴル東部の言語状況

内モンゴル東部のモンゴル族は、漢語とモンゴル語を併用する中で、言語環境の変化を経験している。阿(2010)の研究によれば、漢語の使用が増加する一方で、純粋なモンゴル語が失われつつあると認識されており、これが文化的アイデンティティにも影響を与えている。また、双言語教育政策により、モンゴル族の子どもたちは小学校から漢語とモンゴル語の両方を学ぶことが義務付けられているが、モンゴル語の能力低下が問題視されている。

言語能力の低下は、ホーリン・ウリゲルの後継者育成にも影響を及ぼしており、伝統文化の継承に重大な課題をもたらしている。ホーリン・ウリゲルの伝統を維持するためには、モンゴル語教育を強化し、言語基盤を再構築することが急務である。政府や教育機関は、この問題に積極的に取り組み、モンゴル語の保護と普及を推進するための具体的な措置を講じる必要がある。

VII まとめ

21世紀のグローバル化と経済発展は、内モンゴル東部の社会環境に大きな変化をもたらし、特に伝統芸術であるホーリン・ウリゲルなどの少数民族文化にも大きな影響を与えている。本文から得られた結論は、現代化と都市化の進展が、伝統芸術の継承と発展に新たな課題と機会を生んでいるということである。都市化や経済発展により、モンゴル族のライフスタイルが多様化し、伝統文化の継承が難しくなっている一方、伝統と現代文化の融合によって新しい文化的表現が生まれ、伝統芸術の意義や価値観も変わりつつある。

また、TikTokなどのショートビデオといったニューメディアの普及は、伝統芸術に新たな可能性をもたらし、特に若い世代を含む幅広い視聴者に伝統文化を紹介するチャンスが増えている。伝統的な要素を保ちながらも、ニューメディアや新しい演出を取り入れることで、伝統芸術の魅力をより多くの人に伝え、強化することが可能になっている。

さらに、社会環境の変化はモンゴル語の使用や文化の継承にも深刻な影響を及ぼしており、特にホーリン・ウリゲルのような語り芸能の後継者育成が困難な状況にある。モンゴル語教育を強化し、文化的アイデンティティや伝統芸術の継承に対する意識を高めることが急務である。

以上のことから、伝統文化が現代社会で生き残り、発展していくためには、革新的な方法や戦略が必要であることがわかった。社会、文化、教育の各分野で積極的な取り組みを進め、伝統芸術の継承と革新を通じて、少数民族の文化遺産を次世代に伝えるための包括的なアプローチが求められる。

おわりに

筆者は中華人民共和国・内モンゴル自治区通遼市でモンゴル族の家庭に生まれ、中国語教育を受けて育った。親や親戚の世代がウリゲルに強い関心を持っていた一方、日常会話程度のモンゴル語しか理解できなかった筆者は、その文化的魅力を十分に感じ取ることができず、文化や伝承について深く理解する機会を得られなかった。日本への留学中で、自民族の文化的アイデンティティの維持について考えるうち、家庭環境がその維持において果たす役割の重要性を改めて認識するに至った。

修士課程に進学してからは、ホールチへの調査を行い、多くの協力を得ることができたが、経済的な理由で協力を得られない場合も少なくなく、次世代への伝承に対する課題や不安を強く感じた。本稿では、伝統芸能であるホーリン・ウリゲルに焦点を当て、現代社会や情報技術の進展にどのように適応しているのかについて考察した。ただし、特定の芸能に限定したため、より広範な文化的アイデンティティやメディア利用の全体的な変化については十分に論じることができなかった。外モンゴルにおいてもウリゲルに似た文芸が存在することを知り、今後はその若い世代に対する調査や比較研究を行う必要があると考えている。

今後の研究では、伝統芸能が現代社会においてどのように文化的アイデンティティを形成し、影響を与えているのかをさらに広い視点から探求することが求められる。デジタルメディアの利用、教育システム、経済的価値、モンゴル国のヨーチンなど、多角的な視点を取り入れた分析が必要である。また、具体的なケーススタディや実地調査を通じて、現代のモンゴル族コミュニティにおけるホーリ

ン・ウリゲルの役割や意義を詳細に明らかにしていきたい。

本文の遂行にあたり、多くのホールチから調査への協力をいただいたことに深く感謝する。また、指導を頂いた先生をはじめ、研究を支えてくださったすべての方々へ心より感謝の意を表す。さらに、研究を支えてくださった神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」にも、改めて深く感謝する。

参考文献・資料

〈日本語〉

- 阿拉騰巴特爾(2010)「多言語社会における少数民族の変容—現代中国のモンゴル族を中心に—」神戸大学大学院。
- 島村一平(2011)『増殖するシャーマン—モンゴル・ブリアートのシャーマニズムとエスニシティ』春風社。
- F. ブリス(2000)「音楽とアイデンティティ」『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』(柿沼敏江訳)大村書店 189-221。
- 李連榮(2005)「中国青海省チベット族の民族文化—他民族との交流と融合—」『愛知大学特集：地域と民族の生活文化』21(17)：75-89。
- モンゴル研究所(2007)『Ⅷ 近現代内モンゴル東部の変容』雄山閣。
- 蒙古貞夫(漢名：楊陽)(2021)「モンゴル民族の伝統芸能—ウリゲルの起源と発展に関する考察—」『アジア教育文化ジャーナル』(3)：7-37。
- 蒙古貞夫(漢名：楊陽)(2021)「モンゴル民族の伝統芸能ウリゲルの変容研究」東京学芸大学大学院。
- ナランピリゲ(2009)「モンゴル族における牧畜儀礼の一環としてのオボー祭祀—オボー及びその祭祀とシャーマニズムとの関連性から—」神奈川大学大学院。
- スチント 著/サランゴウ(2011)訳「ホールチの種類とウリゲルの説唱伝統」『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』(3)：77-94。

〈中国語〉

- 王迅(1995). 中国东部蒙古族民间说唱艺术考略.《民族文学研究》,2: 99-104.
- 秦塔娜, 特塔日巴(1999). 关于旧蒙古说书的起源及其他.《民族文学研究》,2: 35-37.
- 赵之恒(2000). 清初内蒙古地区流民问题析论.《内蒙古师范大学报(哲学社会科学版)》,6: 36-42.
- 萨仁格日勒(2001). 蒙古史诗生成论. 中央民族大学出版社.
- 张士尊(2003). 清代东北移民与社会变迁: 1644-1911. 东北师范大学.
- 阎天灵(2004). 论汉族移民影响下的近代蒙旗经济生活变迁.《内蒙古社会科学(汉文版)》,25(3): 18-22.
- 曹道巴特爾(2005). 蒙汉历史接触与蒙古族语言文化变迁. 辽宁民族出版社.
- 珠颯(2005). 清代内蒙古东三盟移民研究. 内蒙古大学.
- 朝克图, 赵玉华(2007). 蒙古族非物质文化遗产“胡仁·乌力格尔”的载体胡尔奇研究——以“毛依罕杯”胡仁·乌力格尔大赛实况分析为例.《中央民族大学学报: 哲学社会科学版》,2: 5.
- 杨玉成(2007).《胡尔奇: 科尔沁地方传统中的说唱艺人及其音乐》中国艺术研究院.
- 佟宝山(2008). 东部蒙古藏传佛教寺院佑安寺考述.《辽宁工程技术大学学报: 社会科学版》,9(5): 1.
- 包金刚(2008). 多才多艺的民间艺人—胡尔齐.《内蒙古师范大学学报: 哲学社会科学版》,37(4): 3.
- 谢秀云(2008). 胡仁乌力格尔在科尔沁地区发展的原因.《赤峰学院学报》,29(5): 59-61.
- 吴金凤(2008). 论藏传佛教对辽宁省阜新蒙古贞地区的影响.《辽宁工程技术大学学报》,10(6): 3.
- 韩星(2018).《阜新蒙古族艺人杨铁龙说书研究》沈阳师范大学.

- 王芸璇, 陆尧选(2021). 乡村与青年:自媒体短视频中的“IP”生产与“流量”变现—以理塘县“丁真”现象为例.《中国青年研究》, 90-97.
- 王蕾, 黄竹兰(2021). 新媒体环境下短视频对贵州少数民族文化传播的影响.《贵州民族研究》,042(003): 147-151.
- 王怡丹(2021). 全媒体背景下少数民族村寨文化传播探析.《媒体融合新观察》,4: 88-90.
- 滕驰(2021). 内蒙古牧区新型都市化背景下蒙古族生活方式的变迁.《云南民族大学学报》,33(2): 58-6.
- 孙梦娇(2022). 新媒体下蒙古族流行音乐创作的新变化.《参花》,1: 63-65.
- 刘萍(2023). 新媒体时代下的少数民族文化传播探讨.《中国民族博览》,10: 72-74.

〈WEB資料〉

- 中国非物质文化遗产网·中国非物质文化遗产数字博物馆(乌力格尔)
https://www.ihchina.cn/project_details/13656
- 中央网信办 第52次《中国互联网络发展状况统计报告》(全文)
http://www.cac.gov.cn/2023-08/29/c_1694965940144802.htm (2023/12取得)

(はく こくちゅう)

《翻 訳》

青の風景

Ⅱ. ナツアゲドルジ
(訳) 織田 幸彦

青々とした景色 ほうほう
青葉と花の山だよ ほうほう
あなたの勇氣漲れば ほうほう
遊べよ山で ほうほう

彩なす景色 ほうほう
アップルの山だよ ほうほう
愛する二人の子を連れて ほうほう
安住できる山だよ ほうほう

清水は冷泉だよ ほうほう
水流、北の斜面から ほうほう
獅子と虎の子 ほうほう
十頭、二十頭、群れになる ほうほう

松や楡の木 ほうほう
木の葉に連られて揺れる ほうほう
鷹のひな鳥 ほうほう
湿地の上で輪を書くよ ほうほう

(次頁につづく)

ヤマナラシ、楡の木 ほうほう

山沿いの岩場に ほうほう

隼のひな鳥 ほうほう

愛らしくさえずる ほうほう

彼方の三本の楡 ほうほう

黄金よりも輝いて ほうほう

吾子よ可愛や ほうほう

遊んではしゃいで愉しそう ほうほう

原題 Цэнхэрлэн харагдах (Д.Нацагдорж) 1923年

「・・・浦の苫屋の秋の夕暮れ」感傷的な若者 T 君は秋の暮色や落陽の光芒にばかり気を取られていました。ある夏の日、「万葉の旅」を鞆に入れて奈良の橿原神宮のあたりを独りで歩いていると、万葉の古人が青年に囁きます。「どうか私のことを思い出して」「お前に話すことなどない」「野原の向こうに私の想い人がいる」「ほら、雄鹿が恋を歌っている」・・・ふと見上げると、社殿の背後に雲が湧き出たような畝傍山の姿がありました。この時 T 君は初めて、山野の生命力というものに心を奪われました。

訳者所蔵の Ц.Дамдинсүрен 編集による選集(1961年刊)の冒頭に掲載、色彩に溢れ、歌うような音感です。歌劇「ウシャンダル王」が 1920 年代に作曲され、モンゴルで上演されました。本作はここで初めて劇中歌として披露されました。その後原文の再発掘や流行歌の詞曲を経て、巷間に流布しております。本編は、ほぼ頭韻が踏んでありますので、固有名詞の多い4-5連以外はなるべく、韻律を施しました。

(おだ さちひこ)

《翻 訳》

科 学

Д. ナツァグドルジ
(訳) 織田 幸彦

新文明の到来にて、科学の広く行き渡り
新時代の人々は、科学の恩寵受くるなり
写経典籍、投棄され
斜陽暗転、地に没したり

仏法神託永らく傾聴され
万世参百年、暗き穴にて安住す
物理科学の、俄かに出現し
万民、誤謬と正当を分かち

古き教義を忘れ去り
不実の信仰捨て去って
不遜ほら吹き僧侶ども、狼狽し慟哭す
空しく喘ぐ、虚ろなる経机の下

物理科学それは —
文明を啓く剣
不知を映す鏡
汎世界の同志なり

原題：Шинжлэх ухаан (Д.Нацагдорж) 1931年

《翻 訳》

青春は花の如く

Д. ナツァグドルジ
(訳) 織田 幸彦

若くして死にたい人は誰？
いやいや、誰も望まない
長寿の秘訣は？
いやいや知らないよ、誰もね

健康すなわち長寿なり
それはあなたの気遣い次第
青春は
ダリアのように

ゆらゆら揺れる花を
色なき風が翻弄する
健やかな身体に
病魔忍び寄る

花を飾れば
日ごと水を遣り
身を守るには
常々予防、怠りなく！

原題 Залуу Нас Цэцгийн Адил (Д.Нацагдорж) 1935年

.....

上の2篇はいずれも啓発の詩です。「科学」は原文の頭韻を意識しながら、擬古文調にしました。昨年訳者はウランバートル市内のガンダン寺にお参りしましたが、僧侶は皆さん真面目そうな方ばかりで封建時代の生臭い片鱗は全く無かったです。「青春は花の如く」については3連にある Намрын салхи (秋風)の厳しさ辛さを、私は知らないままです。真夏(7-8月)の優しい季節しか訪問したことがありませんので。夭折した詩人の花卉は、投獄され、公私ともに世間の苛烈な風に揺さ振られ、無残にも散り散りになったようです。

(おだ さちひこ)

《雑 感》

2024年夏・モンゴルの旅 — ホブド点描 —

吉本 るり子

コロナ禍明けの2024年夏、モンゴルを訪れ、ホブド^{アイマク}県を旅した。ほぼ40年ぶりだった。

社会主義時代の2年の留学期間、行動範囲はウランバートル(U.B.と略す)から半径何キロ以内と制限され、大学が実施する夏の^{プラクティク}実習旅行でハルホリン方面を見学した以外は、外国人旅行者向け観光地を除き地方を旅することができなかった。自由に旅行できる今、行きたい場所は数多だったが、体力・気力のあるうちにと、モンゴル西部ホブド方面とした。ウランバートルから地方への飛行機便は発着曜日が限られ、7月28日：U.B.発～ホブド市着、8月1日：アルタイ市発～U.B.着の4泊5日、ホブド北部、バヤンウルギー県境の万年雪を頂くツァンバガラヴ山(標高4193m・国家特別保護地区指定)方面からホブド南西部ツェツェグ・ソムを経て、空港のあるバヤンホンゴル県アルタイ市までジープ(ランドクルーザー)で走破する、旅行社によると総計約1300kmの強行軍となった。

◇家畜たちの楽園?! ツァンバガラヴ山麓キャンプ地

7月28日、ホブド市からツァンバガラヴ山を間近に眺める標高約2700mの高原のキャンプ地へ。ここからツァンバガラヴ山のあの雪渓まで、「人が引く馬に揺られて5時間で行けます。行きませんか?」と旅の初めに運転手のビルバーさんに尋ねられて心動いたが、この日程ではどうにも無理だった。

キャンプ地の管理人家族のゲルの近くに我々旅行者のゲル2つ、そして通訳のジャミヤンさんとビルバーさんのテント一張りが設営されているだけ。旅行者向けキャンプ地だが我々の他に旅人はいない。ここらあたりは広々とした高原。牧畜にとっては移牧の夏営地で涼を求めて、下から移動してきた馬の群れ、牛の群れ、山羊の群れがそれぞれゆったりと草を食んでいる。離れてゲルが点在するが、群れ近くに人影はない。



写真1 万年雪を頂くツァンバガラ
ヴ山(標高4193m)遠景



写真2 ホブドの山並み



写真3 ツアンバガラブ山麓、
ゆったり草を食む馬たち



写真4 ツアンバガラブ山麓
の放牧地(標高約2700m)



写真5 仔山羊を待つ母山羊



写真6 母山羊に駆けよる仔
山羊



写真7 乳を飲み、そして一
緒に帰って行く

まだ明るい19:00時過ぎ、ゲルの外が何やらメエーメエーと賑やかだ。近くに山羊たちの群れがある。よくよくみると、右の少し高くなっている丘状の牧地から、仔山羊がメエーメエーと叫びながら一頭ずつ駆け下りてくる。メエーメエーはそれだけでなく、下の牧地の親山羊の群れからもまた至る所で聞こえてくる。何事？ しばらく眺めていてわかった。搾乳のために、仔山羊たちは母親から引き離され別の群れとなって上の丘の牧地にいたのだが、この時間帯群れを解かれ、母山羊の群れに飛び込んで母親を探し出し、乳を飲むのである。下で待つ母山羊も我が子を呼び続け、見つけては乳をやる。毛色がまったく違うのにも思うケースもあるのだが、彼らが間違えるはずはない。この邂逅が毎日繰り返されるのだ。

牛たちは自発的に搾乳にやってくる。そしてそのあと仔牛に飲ませる。これもいつものルーティン？ とにかく人影がほとんど見られず、家畜たちがそれぞれ自律的に動いているように思える。群れを外れて、草を食んでいる馬がいる。ふらふらと牛3頭が私たちのゲル近くにやって来た。ジャミヤンさんに教えられ、チョー、チョーと追い払う。家畜と人との緩やかな関係。

翌朝、隣の管理人さん家族のゲルを訪問、スーテイツアイやボールツォクをよばれる。馬に乗りますか？と聞かれる。娘さんは馬に乗って約20km離れたところの party (集まり) に行ったという。小学校高学年ぐらいの息子さんに、「将来牧民になるの？」と尋ねると、「思っていない」という返事。さらに問いかけると、恥ずかしそうに逃げていった。

◇西域の風が吹く ホブド市の青空市場

少し離れた地点からホブド市を眺めると市街地の少し手前、ボヤント川川辺の緑地帯に点在するゲル群が見える(写真8)。ホブド市には、ボヤント川沿いにゾスラン(夏の別荘)地帯が設けられ、そこには誰でも自由にゲルを建てることができるという。市中心部の住民も夏は緑豊かなボヤント河岸へ移動し、そこから市街地へ出勤する。他の季節、そのゲルはどうするのかと聞くと、物置に保管するという。ツァンバガラブ山のキャンプ地では移牧の畜群を見たが、夏の間、人も涼を求めて移動するのだ。自然と人の暮らしとの自由な関係。古くは大都(北京)を造営したフビライ・ハーンも4つの宮殿^{オルド}をもち、10月から2月までは大都、春の3月から秋の9月までは上都に居住し、移動の道すがら、ツァガーン河畔の宮殿等に滞在した。



写真8 ボヤント川辺の緑地帯

キャンプに備えホブド市で、青空市場に買い出しに行った(写真9)。市場には家用トラックで運ばれてきた野菜類、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、キュウリ、ネギ、キャベツ、トマトや果物類、特に瓜類が豊富に並ぶ。私たちは西瓜 шийгүя、瓜 амтат гүя、小粒のホブド産リンゴ(これはホブドにしかないリンゴだそうだ)を購入。他にキュウリとトマトも買い込んで、約6000～8000トグルクだった。豊かな光景。ここでは西域の風が吹く。



写真9 ホブド市の青空市場

◇砂利道は 馬を操るがごとく

今回、舗装道路を走れるときはラッキーだった。ホブド市からツァンバガラブ山麓キャンプ地に向かうときも、舗装道路は80kmで終わった。2泊目の宿泊地ドウルゲン・ソムから3泊目のツェツェグ・ソムまではかなりの距離だ。運転手のビルバーさんは、交渉し水力発電所のゲートを通してもらった。ここから建設中の舗装道路に入れる。完成すればこの道はホブド市と南を結ぶ近道となる。しかし舗装区間は途切れ途切れ、それ以外はデコボコがあったり、流れる小川を渡ったりとハードなルートだった。熟練運転手のビルバーさんは何本もある轍のあとを、瞬間的に選んでは辿った。モンゴル語の^{ジョローチ}運転手という語は、馬の^{ジョロチ}“手綱”を握る人の意だが、ビルバーさんは乗馬の名手だそうで、私はしごく納得した。

◇道路 トラブルも知り合いの力で解決!!

ホブド川沿いで休憩後、車が動かなくなった。通訳のジャミヤンさんが電話で誰かに尋ねてはビルバーさんがやってみる。しかし、動かない。ジャミヤンさんが電話して、代車をもってきてもらうことになった。通りがかりの知り合い танил が車を止め、やって来た。事情を話すと、車に詳しい彼の同乗者がビルバーさんに復旧方法を伝授、やってみるとエンジンがかかった。一同ホッとする。ジャミヤンさんは代車要請中止を電話で伝えた。その後も休憩で車を止める度に動かなくなったが、ビルバーさんは対処法を習得したようだ。この道は舗装道路で車は走っているが、交通量は非常に少ない。でも誰かが車を止めて助けてくれる。私は40年前の夏の^{プラクティク}実習旅行を思い出した。雨上がりの草原で、ぬかるみにはまって私たちのマイクロバスは動かなくなった。全員で押したり引いたり。周囲には何もない。運転手さんが遠くのゲルヘスコップを借りに行ったが拉致があかない。みんなここで野営かと、座り込んだ。そこへトラックが一台通りかかった。トラックがトラクターを呼んできてくれた。マイクロバスはぬかるみを難なく脱出し、我々は無事、宿泊予定のソムに着いた。あれは社会主義時代だったからとっていたが、同じ力が今も働いている。

◇豊かな鉱物資源 露天掘りの炭鉱

ツェツェグ・ソムに向かう道中、丘を越えたところで左手の山並みに露天掘りの炭鉱を見た(写真10)。一律の傾斜で山裾が削られていた。中国製のトラックが、2台、3台と連なって満載の石炭を運んでいた。なんでも、国境の二つの関門から中国へ搬出するという。毎日毎日こうして運び出すのだ(写真11・写真12)。

ソム設立100周年行事についてのゾーニーメデー紙のインタビューでソム長は、「炭鉱事業の経済効果でソムの住民の生活水準は上昇してきている。炭鉱関連でソムへ転入する人々は増えており、土地や職の斡旋等の業務を段階的に実施している」と述べている。



写真10 露天掘りの炭鉱



写真11 石炭満載のトラック



写真12 連なって石炭を運び出すトラック、国境関門へ

◇牧民運動の聖地、ツェツェグ・ソム訪問

ツェツェグ・ソムへは何としても行きたかった、モンゴル革命(1911年)前後の”アルド・アヨシの牧民運動”の舞台である。いわば牧民運動の聖地だ。同ソムには、アヨシ記念広場がある。1979年に記念パネルが設置され、2019年の生誕160周年に現在のように整備された。

ソムの記念の広場の石碑にはアヨシについて、次のように刻されている。

アルダルジャビイン・アヨーシ

「アルダルジャビイン・アヨーシは1859年、ザサクトハン・アイマク^{アルド}のダルハンベイリン・ホシヨーのヌツゲンという土地で生まれた。1889年にホシヨーの民^{アルド}ダンバルの娘、ドルマーと結婚、息子ダルハー、ツェベック、娘シヨムボンをもうけた。また、養子(男)をひとり育てている。

彼は清の残忍な支配者、皇帝・王侯貴族が、モンゴルの人民を抑圧し搾取していた時代に、人民の先頭にたって抵抗し闘った。

1911年にマニバザル・ホシヨーの民を先導し闘争したことから、ホシヨーの領主マニバザルはアヨーシに苛烈な拷問を科し、牢獄に入れた。1911年2月26日、民衆は「アルド・アヨーシ」を救出し、ゴンボジャブ・タイジをはじめとする200人余りが蜂起し、「ツェツェグ・ノーリン・ドゴイラン」を結成、44カ条の要求を記した訴訟状を提出した。

訴訟状は封建領主の圧政に抗して領主の抑圧を摘発したものであり、165人が、銀椀を囲んで(誰が首謀者かわからないように)円形に署名した。

「アルド・アヨーシ」は闘争を先導し、そのために「9種の拷問」を受け、それに耐え抜いた勇者であった。民衆のために果敢に闘ったアヨーシを、人々は「アルド・アヨーシ(民のアヨーシ)」と呼び賞賛した。

「アルド・アヨーシ」は1929年に開かれたハンタイシルオール^{アイマク}県小会議およびモンゴル人民革命党第8回大会に、代表として選出された。

彼は人民革命が勝利しよき時代を迎えたことを見つつ、1939年、享年80歳で亡くなった。

A. アヨーシの民族解放の闘争、勇気、功績を永久に記念して、同ソムの学校の名称を1959年にアルド・アヨーシ記念学校とし、アヨーシ像を1961年ホブド県の県庁所在地に、さらに、1966年ツェツェグ・ソムの中心地に建立し称えた。」

アヨーシ記念広場の解説パネルによると、広場は拷問を受けた場所に建設され、ドゴイランのメンバーが結集したシャハート шахаат という土地はここから西へ20kmの地点だという。記念広場は広大な平原のど真ん中にあった。私は、歴史家 Sh. ナツアッグドルジの著書(Ш.Нацагдорж. Монголын феодализмын үндсэн замнал (Түүхэн найруулал) :УХГ,1978.)でアヨーシの牧民運動についての記述を読み、アヨーシが領主マニバザルに抗議して、ツェツェグ・ノーリン・ドゴイランを結成し、その仲間たちと立てこもったオーリン・アムという土地に行ってみたくと思った。日本の一揆という逃散をイメージしたのだが、現地で見ると立てこもるような狭い空間ではなかった。



写真13 アヨーシ記念広場



写真14 周囲は広大な平原

◇ドゴイランと傘^{からかさ}連判状

アヨーシ記念広場には、小山の頂上のアヨーシ座像、アヨーシの受けた"9種の拷問"の碑のほか、狼のモチーフの下部に、訴訟文書の円形の署名を刻んだモニュメントがある。ドゴイラン дугуйлан と言う言葉を辞書でひくと、訴訟文書が皆の合意であり、誰かが首謀者ではないことを示すため訴訟文書に円環状の署名を行ったことから抵抗の主体、牧民運動の集団を、ドゴイラン дугуйлан と呼ぶようになったとある。円環状の署名は日本の一揆でみられる傘連判状と同じ形態だ。最近私はこうしたものが、自分の故郷で、幕末の「生駒一揆」の際に作成されていたことを知った。場所や時代は違えども、心の底にどこか同じ思いがある。



写真15 広場頂上の
アヨーシ座像



写真16 訴訟文書の円環状の
署名を刻した
狼のモニュメント

◇モンゴルの未来を担う？ タフで明るい人々

40年ぶりのモンゴルで出会った人々はタフで、明るい人々だった。ドウルゲン・ソムの^{ホテル}宿泊所の女主人は小学校の先生を勤め、定年退職。50代で年金生活に入り、今は5つの^{ホテル}宿泊所とパン・菓子製造工場、保育所を経営する。^{ホテル}宿泊所の^{ハシヤ}板囲い内には、保育所およびパン・菓子製造工場棟があり、自らパン、菓子を焼く。子どもは3人、娘さんの子どもたち、つまり孫が夏休みで来ている。幼児教育はバッチリだ。通訳のジャミヤンさんは、我々をアルタイ空港から見送ると、その足で次の旅行客をチンギス・ハーン空港で出迎えるため、長距離バスでU.B.へと向かった。彼は、中古車販売業も行っている。運転手のビルバーさんは長年技術学校の教師を勤め、さらに自然保護団体のメンバーでもある。ジープのダッシュボードにはホブドに生息するユキヒョウ三匹のぬいぐるみが置かれていた。U.B.で開催された自然保護団体の会合でビルバーさんがもらったものだ。揺れる度に轍のあとを辿るように右へ左へと移動し、和ませてくれた。U.B.でのこと、帰国の当日、空港までタクシーを頼んだ。現われたのは、きれいな自動車をもつ幼児連れの夫婦で、妻がドライバー、夫は助手席に子どもを抱いて乗り込んだ。私達をおろした後、子どもと空港へ遊びに来たかのように楽しんでいた。自由な働き方。かたや内部まで企業・職場に取り込まれ、過労死さえ起きる日本。ホブドで朝食・昼食に立ち寄ったソムの食堂の料理はとても美味しかった。ジャガイモ入り炒めご飯、キャベツサラダ添え。ソムの料理上手のおばさんが、楽しんで作ってくれている、そんな気がした。活力あるモンゴル、その未来は明るい!?

(よしもと りりこ)

《活動報告》

活動報告 (2024年)

吉本 周平
内田 敦之

月例会について

今年はコロナ以降久しぶりに合評会が実現した。表にある通り、7月まで充実した発表が続いたが、8月以降は事情あって例会を開けなかった。33号の合評会は、face-to-face、リモート併用の形で実現したい。例会で中間発表、「研究ノート」「論文」へと進化させ、「合評会」、例会もface-to-face開催を実現したい。そういう折の雑談から生まれるものも多い。研究だけではなく、会の運営、「モンゴル研究」の編集等々についても。2025年も充実した発表と投稿の1年にしましょう。「雑感」の例会発表も大歓迎。発芽を待つ種に水と光と栄養を！

(敬称略)

3月例会	3月17日 16:30-	Zoom Meetings	芝山豊	「VIVANTと烈士之碑とCOP28」
4月例会 「モンゴル研究」32号 合評会	4月14日 19:00-	Zoom Meetings		(1) 吉本るり子(雑感)「1984年、モンゴル社会のラフスケッチ? 家族を中心に、講義ノートから」 (2) 織田幸彦(翻訳) D. ナツァグドルジ「インドの踊り子に捧ぐ」(翻訳) D. ナツァグドルジ「世界の三大奇跡」 (3) 内田敦之 ①(研究ノート)「モンゴル秘史を読む会、その後」②(活動報告)水曜例会:「モンゴル秘史を読む」③(活動報告)水曜例会:「内モンゴルのモンゴル語と双語教育の問題について」 コメント: ボヤンさん (4) T. エネビシ(研究ノート)「Д.Пагмадуламыг уран сайхны зохиол, бүтээлүүдэд хэрхэн дүрсэлж илэрхийлсэн бэ?」 (5) 今岡良子(資料紹介)「歴史家 E. チメッドツェレンが D. パグマドラムを解放した記述 — 1973年に発行された『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』を読む—」
6月例会	6月1日 19:00-	Zoom Meetings	白国忠	「情報化社会における少数民族伝統芸能の発展と活用 — モンゴル族の口承文芸『ウリゲル』の考察」
6月例会	6月29日 19:00-	Zoom Meetings	T. エネビシ	32号の研究ノート「Д.Пагмадуламыг уран сайхны зохиол, бүтээлүүдэд хэрхэн дүрсэлж илэрхийлсэн бэ?」について
7月例会	7月31日 19:00-	Zoom Meetings	ガシチョウ	「異文化背景における自然保護活動の比較研究」

(吉本周平)

週例会(水曜例会)について。

水曜例会「モンゴル秘史を読む会」は、昨年同様、隔週水曜日の19~21時、概ね月2回開催してきました。ただ、徐々に参加者が少なくなり、担当者のレジュメの準備も大変になってきたことなどを考慮し、7月から月1回第2水曜日に開催することにしました。6月と9月は他の参加者がいなかったため不開催としました。

「読む会」のペースで秘史全12巻282節を読み進めると7～8年はかかるだろうということで、ある時期にペースを上げて読もうということになりましたが、それも限界があります。さらに、7月からは月1回ペースになったので、読了まではより時間がかかることになりました。「モンゴル語が理解できないモンゴル人の子どもたちにも秘史を読んでほしい」、「日本人とモンゴル人がお互いにより理解できるための一つのきっかけになれば」などと願って秘史の翻訳を目指している内田のささやかな夢を実現するには「読む会」のペースとは別に考えないといけない思いを新たにしています。締切りのない原稿はちっとも進まない性格ですので、研究会の皆さん、たまには発破をかけて下さい。どうかお願いします。

(敬称略)

水曜例会	Zoom Meetings		
①	1月10日	内田敦之	第77回 第100～101節
②	1月24日	賀志超	第78回 第102～103節(巻二終わり)
③	2月7日	チョモルリグ	第79回 第104節(巻三始まり)
④	2月21日	内田敦之	第80回 第105節
⑤	3月6日	チョモルリグ	第81回 第106～107節
⑥	3月20日	D. ヒシグジャルガル	第82回 第108～109節
⑦	4月3日	賀志超	第83回 第110～111節
⑧	4月17日	チョモルリグ	第84回 第112～113節
⑨	5月1日	内田敦之	第85回 第114～116節
⑩	5月15日	D. ヒシグジャルガル	第86回 第117～118節
⑪	5月29日	賀志超	第87回 第119～120節
⑫	7月19日	内田敦之	第88回 第121節
⑬	8月14日	チョモルリグ	第89回 第122～123節
⑭	10月9日	内田敦之	第90回 第124節
⑮	11月13日	チョモルリグ	第91回 第125～126節(巻三終わり)
⑯	12月11日	D. ヒシグジャルガル	第92回 第127～128節(巻四始まり)

第93回は年明け1/8(水)第129～130節を読む予定です。担当は内田。

(内田敦之)

編集後記

- ◇編集長の不手際から 32 号で掲載できなかった論考を今年も出せず残念です（待っていますよ）。
- ◇現代的な問題意識をもってホーリン・ウリゲルの調査を行い、考察を加えた論考を掲載することができました。「研究ノート」ですので、さらに研究を深め（月例会での中間発表と議論も楽しみです）、「論文」となることを心待ちにしています。
- ◇この世を生きていく中で、多彩な人とその生き方、様々な地域文化と生活、多様で常に変化する自然、日々の生活圏から世界・宇宙に至るまで人間が引き起こす信じられないような出来事、芸術や書物。多くの出会いから受け取ったこと、感じたこと考えたこと。感じるように考えるようになったこと。自分をつくっているもの。自分を動かすもの。芝山氏の論考に、自分の現在地を思い、原点を思い出した方も多いのではないのでしょうか？モンゴルが「生涯の経歴」となったことにより、何が見え、何が聞こえ、それにどう応えるのか。引用されている磯野富士子さんの言葉が胸に響きます。「モンゴル研究」が「この世で作り得る最も美しい人間関係の一つ」を支える何らかのよすがとなることを願います。
- ◇さて、次号の編集長は誰？

（吉本周平）

『モンゴル研究』第 33 号

2024 年 12 月 26 日発行 定価 500 円

編集・発行 モンゴル研究会

〒562-8678 箕面市船場東三丁目5番10号

大阪大学言語文化研究科 今岡良子研究室気付

モンゴル研究会 HP: <http://mongolkenkyukai.jp/>

e-mail: mail@mongolkenkyukai.jp

MONGOL-KENKYŪKAI (the Society of Mongolian Studies, Founded in 1970)

c/o Imaoka's office, Osaka University, Graduate School of Language and Culture 3-5-10 Senba Higashi, Mino city, Osaka pref., 562-8678, Japan

MONGOL-KENKYŪ

Journal of Mongolian Studies

No.33

CONTENTS

Dec. 2024

Lecture

VIVANT, Resshino-hi, and COP28 *Yutaka SIBAYAMA*..... 2

Remarks

Development and Utilization of Traditional Performing Arts of Ethnic Minorities
in the Information Society:A Study on the Mongolian Oral Literature Ulger
..... *Guozhong BA I*.....30

Translations

D. Natsagdorj "The sight of blue" *Sachihiko ODA*.....47

D. Natsagdorj "Science" *Sachihiko ODA*.....49

D. Natsagdorj "Youth is a flower" *Sachihiko ODA*.....50

Essay

A Summer Trip to Mongolia in 2024
– Some Skeches of Khovd – *Ruriko YOSHIMOTO*.....51

Activity Report

Activity Report 2024 *Suhei YOSHIMOTO* • *Toshiyuki UCHIDA*.....57

Edited by

MONGOL-KENKYŪKAI

Osaka Japan